

---

# 緑の隠れ里

癸

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緑の隠れ里

### 【Nコード】

N6580F

### 【作者名】

癸

### 【あらすじ】

人の世界とは隔てられた空間で生きている三つ子、サトラ、ルマ、テリー。彼らは自分達がおかれている状況に不満を抱きつつも抜け出せずにいた。ある日、自分達の領域に不審な気配を感じ、彼らは自分達の役目を果たす為集落を飛び出した。一方、その不審な気配の主である人物は、直前まで自分がいたはずの場所とはまったく違う場所で目を覚ましていた。なんとかして元の場所に帰ろうと行動を起こしかけた矢先に、侵入者に怒りを抱いた三つ子と遭遇する。

## プロローグ（前書き）

人外の生物が登場しますが、中には人の姿をとれる存在もいます。話の中心は不審者扱いされている人物で、波乱万丈とも言える過去の持ち主なので秘密が多く、最初の方は曖昧な部分が多いです。

## プロローグ

空は見渡す限り雲一つない、快晴。

けれど、その空の下、木陰に佇む少年の心の中では今にも嵐になりそうな黒雲が一部の隙もなく広がっている。

『どうしたの。また嫌な事でもあった？』

耳ではなく頭に直接響くような声は、心配しているとも呆れているとも判断できない口調でそう問うてきた。

「…別に」

「あら、口を使って話すだなんて、珍しい事もあるのね」

今度は苦笑して言うてきた相手を、気だるげに振り返る。そこには髪の長い、夜行性動物のような瞳をした少女が佇んでいる。

「お前こそ、その形はどうした」

「ああ、これ？気分転換、つてところ？」

首を傾げ、それでも楽しそうに笑っている少女にそれ以上は問わず、少年は再び正面を向いた。

「サトラこそ、その格好はどうしたの？」

今更気付いたのか、と心中で嘆息しながらも、少年はきちんと答えを返す。

「別に。それこそ気分の問題だ」

「そっけない。テリーならもつと相手してくれるのにー」

不満そうに口を尖らせてみせても、見て欲しい相手は自分を見ていない。その無意味さに少女はさっさと口の形を元に戻した。

この、何事にも諦めてしまっているように見える態度はいただけないわね。と心中で零しながら、それでも彼女は表面上は笑っている。

「ルマ、煩い。そんなに構われたいならそれこそテリーの所へ行ったらいいだろう」

「やあーよ。テリーは確かに付き合いいいけど、本質的なところは

サトラよりも冷たいもの」

つん、とそつぽを向いてしまったのを気配で感じて、サトラはそつと溜息をついた。

彼女の言っている事は事実で、サトラ自身も薄々感じていたことだ。

テリーという名の、明るく、どちらかといえば社交的な印象の少年は、周囲が受け取る印象とは違って交流というものを好まない。自分が許している範囲に見知らぬ者が近づくだけで気分を害する。しかしそれを周囲に悟らせないように振舞うから、彼に近い位置にいる二人でさえ、彼のそういった機微に気付くまでに相当の年月を要してしまった。

「最近は何々する事が多くなってきたから、なるべく傍に寄りたくないのよ」

薄情かしら、と呟いた彼女を責める気にはなれない。何故ならサトラもさり気無く彼を避けているからだ。

「…癩癩を起こすと、手が付けられないからな」

「困ったわね…」

うんざりしたように呟くサトラの隣に座り込んで、ルマは重い溜息を漏らした。

そこで、はた、と何かに気付いたかのようにルマは周囲の気配を探った。

「どうした？」

あまり見ない様子に怪訝そうにサトラが問うと、ルマは眉間に皺を寄せた。

「…長老からの伝言」

「…長老から？」

長老とは年に一度、顔をあわせるかあわせないか、という薄い関係しか持っていない。故に彼は眉根を寄せてルマを見た。彼女はその視線を感じていながらも周囲の様子を探るばかり。

仕方ないので、先を促す。

「内容は？」

「占いの結果が出たそうよ。要点だけ言えばこう。『直まじに招かれざる者が来る』って」

僅かに目を見開いたサトラに強い視線を向けて、ルマは立ち上がった。

「一足先に戻るわ。長老は一月前後でその時が来ると言っていたけど、私は今からでも警戒を怠るべきではないと思うから」

自分の意見だけ述べて、彼女はさつと身を翻すと、急な傾斜を駆け下りて行ってしまった。

招かれざる者が来る。

それは、自分が 自分達みんなが、何よりも恐れ、厭いやっていた事ではなかったか。

『嵐が来る』

心の中で自分に向けてそう言い放ち、サトラは目を閉じて深呼吸をした。

招かれざる者は、大抵が自分達の住処を荒らす者だった。そうでない者は、自分達自身に狙いをつけ、屠ろうとする者だった。

友好的だった者など、一人もない。

『だが』

自分達も、わざわざ彼らに友好的に接した事など皆無だった。

そこから歪な関係になったのかもしれない、と思考を廻らせたところで、時は戻らないから修正のしようもない。

今は、現在と未来を見るしかない。

「…で、僕達に回ってきた役目が、それ？」

胡散臭そうに顔を顰しんめている少年を宥めようとは思えない。

「そうよ。最近子どもが生まれてくる率が激減したとかいいながら、こんな役目をさせようっていうのよ」

「つまり、力試ちからこころしってこと？」

嫌だとでかでかと顔に出している少年に無言で頷いて、ルマは二本の指で問題になっていいる物をつまみ上げた。

「まったくどうして、私達がこんなの着けて里の周りを徘徊しなきゃならないのよ」

むすつとして吐き捨てたルマに注意をしようかと思っただけれど、結局サトラは何も言わなかった。概ね彼女の意見と同じだからだ。

『それはお前達の力が並外れているからだろう』

やれやれ、と頭を振りながら降り立ったのは、一人の女性だった。「……母様……」

ルマがしまった、というように眉尻を下げて残りの二人に視線をやるが、二人はうるたえた様子もなく女性を見つめている。

「頭領は父上なのに、何故長老の指図を受けなければならないのですか？」

『テリー、確かに頭領は父であるが、長はお前の父ではないのだよ』

納得いかない、と静かに怒りを見せる少年にも女性は冷静に答える。

「さすがに父上でも、なんの交換条件もなしに自分の要望だけを通す事はできなかったという事ですな」

『……サトラ、聞いていたのか？』

さらりと真実を断定の形で言っただけの少年に、女性は思わず息を詰め、跳ね上がった心臓を落ち着けるように自身に念じながら尋ねた。

けれど、サトラはそれにも無関心だとばかりに視線をあわせない。「いいえ。あの方の考えそうな事で、しそうな事だからです」

「え……ちよつと待って。それってつまり」「僕達の命と別の事を引き換えにしたって事なの？」

『テリー、命ではない。労働の報酬だ』  
『報酬じゃありません。交換です』

ジロ、と冷たい視線を突き刺してテリーは言い切った。彼の中で

は自分達の命さえ簡単に取引材料にするのかと、その一点にのみ重きがおかれ、また、報酬という、まるで自分達が使われる立場なのだと言われているような表現は認めたくなかった。

『テリー……我らが一族、特に私達は精霊を崇める血筋にある。遠縁とはいえ、長老とて同じ血筋。それ故に、父君はお悩みなのだ』  
困ったように笑う女性にそれ以上文句は言えず、テリーは不機嫌顔で押し黙った。

勝手な振る舞いばかりする長老に対する時は、機嫌をとりつつ自分の有利なように誘導しなければならぬ、というのは、自分達だけでなくこの集落全体での暗黙の了解だ。

それでも、百戦錬磨の長老はそれほど簡単に崩せる筈ではないから、自分達も頭を痛めているのだ。

その時だった。

「……っ！サトラールマ！」

「わかってる！」

叫ぶと同時に飛び出したテリーの後を、同じように飛び出してルマが追う。その後姿を感情の読めない瞳で見送ってから、サトラは室内を物色しだした。

『……サトラ？』

怪訝そうに見つめてくる女性を無視したままサトラは部屋の中を一通り歩き回り、そここでいくつかの物を掴んでは布袋に放り込んでいく。

『サトラ、お前は行かぬのか？』

その言葉には反応して、彼は肩越しに振り返り、女性を一瞥すると窓の外を見遣った。日頃から、まるで牢獄のようだと思っている部屋の、外を。

「必要だと思しき物を揃えたら」

それだけ言って、彼はルマが先程弄っていた物を衣服に着け、急ぐでもなく歩んで扉から出て行った。

全員出て行った扉を、女性は複雑そうに見つめていた。

薄らと瞼を開けて真っ先に視界に飛び込んできたのは、鬱蒼と茂った木々の間から見える、目に沁みるほどの丸い青。

それが空で、それを丸く切り取るような形でひらけている空間に横になっているのだと理解して、眉間に皺を寄せた。

さっきまで、市にいたのに。

ゆっくりと上体を起こすと、胸まである茶色い髪がさらりと流れた。

「…邪魔だな」

見るからに可憐な少女の口から零れたのはまるで少年のような言葉で、もし周りに誰かがいたならば眉を顰めただろう。それくらいに似つかわしくない言葉だ。

「今、何時だ」

くるりと周りを見渡しても、ところどころに光が零れている空間が見えるだけで、全体的に薄暗い。もう一度、今度は自分の意思で空を見れば、空は青い。

「…赤くもないし、ところどころに光があるのなら……夕方じゃ、ないか」

朝か昼かはわからないが、夜でも夕方でもないのならば少しは動きようがある。これで日付がかわっていないのであれば、昼前であるはずだ。

自分は今、恐らくは森の中だろう場所にいるけれど、一緒にいた連れはどうしているだろうか。少なくとも、自分の前後、両脇にそれぞれ陣取っていたから四人は一緒に行動していた筈なのだけれど。「…困った、とでも言えればいいのか？」

客観的に見れば困って狼狽して恐慌状態に陥ったとて不思議はな

い状況にあるにも関わらず、少女は平然としていた。  
する事は決まっている。

「とりあえず、飲み水を探るか」  
独り言をぼつぼつ零しながらも彼女は立ち上がり、躊躇いもなく  
一步を踏み出した。

その時、頭に直接響くような声が届いた。

『主』

声が掛かった事で、少女は開きかけていた口を閉じた。話し相手  
がいるなら独り言の必要はないから。

『心配はいらない。それよりここがどこかわかるか？』

『結論から言えば、それはわからない。けれど確実に言えるのは、  
空間の歪を一度通っているために、ここが最初にいた世界とは違っ  
たかもしれないという事』

そこで、ぴたりと歩みが止まる。

『…つまり「人がいたとしても言葉が通じない」どころか、人がい  
るかどうかもわからない、という事か？』

その問いかけには無言が返ってきたが、否定しないという事はそ  
ういう事だろう。そう結論付けて少女はもう一度周囲を見渡した。  
今度は少し注意しながら。

『……なんだ？何か生き物の気配がする』

『さすがは主です！』

途端、嬉々とした声が響いて、少女は反射的に眉間に皺を寄せた。  
響いた声が予想していたものより大きかったからだ。

『生き物の気配がするのは当たり前だろう。本来森には色々な生き  
物がいるんだから。それで、これはけっこうな大きさだと思っ  
たんだが？』

『そうですね。形はまるで人のようですが』

けれど、人の姿をしていたとしても、貴方がいた世界での『人』  
とは異なるかもしれません。

少し警戒しているような低い声で答えられて、少女はもう一度、

微かにその気配がする方角を見た。まだ、変化らしい変化は見られない。

『とりあえず、大人しくしていてくれ。お前が姿を見せたら、逆に警戒されるかもしれない』

話題の気配の持ち主がどんどん近づいてきているのを何となくでも感じた少女は、一言釘を刺した。

『そんな…』

『向こうがもしこっちの気配を読めるなら、突然数が増えたら警戒が強まるだろう。お前ならどう思う？』

『…仰る通りです…でも…』

もし必要に駆られて後から姿を見せたら、それはそれで物凄く警戒される気がする。

そうは思っても、声の持ち主はそれ以上の意見は控える事にした。

『ああ、お前の言いたい事はなんとなくだがわかる。ところで、あいつはどうした？』

『あいつ？…ああ、彼、ですか』

『そう。どうしたかわかるか？』

『様子を見ると言っ、何処かへ行ってしまいました。彼からはこちらの様子は手に取るようにわかる筈なので、先程は報告致しませんでした』

声の持ち主同様、今二人の間で話題に上っている『彼』は特殊能力の持ち主で、声の持ち主同様に気配を読むことに長けている。だからこそ、彼女は少女に『彼』の居場所を告げなかった。

『勝手な行動をお許し下さい、と申しておりますたけれど…』

『ああ、いい。どうせひょっこりと…』

そこまで言っ、唐突に背後から抱き込まれ、慣れきってしまった少女は驚くどころか、ため息をついた。そして平然と言葉を発する。

『…本当にひょっこりと姿を現したな』

『ん？ああ、彼女と話してましたか？お邪魔してすみません』

悪びれなく笑っているのが気配でわかる。柔らかな物腰でありながら、彼と話していると色々な事を押し通されてしまうので、そうならないよう、少女は結局会話をさっさと終わらせてしまうようになっっていた。

今回もそうだ。

「いい。で、お前は気配を消しているのか」

「?.....ああ、そうですよ。何なら、離れて見てみましょうか?」

察しのいい彼は遠方から近づいている気配に気付き、少女の言葉と照らし合わせて自分で解答を見つけ出した。

「それはお前に任せる。お前は気配を消すのが得意らしいからな」  
いつも隙を突いてじゃれついてくる彼を指しての言葉なのだが、彼はにこにこ嬉しそうに笑っているだけだ。褒め言葉だろうと嫌味だろうと、気にしない。自分にとって価値のあるものがあればそれでいい、と断言するような性格の彼は、この状況においても自身のあり方のままにそこに存在している。

「了解しました。それじゃ」

ぼふ、と少女の頭に手を置いて一撫でし、少年は素早く身を翻し、森の中に消えた。

この状況にいても相変わらずだと心中で呟いた時、上空から突風が吹きつけた。

咄嗟に腕を翳して頭を庇い、風の勢いが少し弱まったところで少女は目を開けた。そしてその正面に佇んでいたのは、一人の少女と一人の少年。そして、一頭のドラゴン。

「.....竜.....?」

東洋の絵に描かれているような細身の竜ではなく、西洋の物語に出てくるような、ずっしりとした、翼のある竜。

彼女の無意識の呟きに反応し、少女と少年の眼光が鋭さを増した。「何をとぼけたことを。ドラゴンを狩るのが目的で訪れたのだろう!」

「.....この格好でそれができると思っのか」

ぼそりと、けれどはつきりと言ってしまった本音を聞きとがめた二人は更に気配を冷たく尖ったものにした。夜行性の動物のような瞳が憤怒の炎を宿して彼女を見据えている。

「目的は」

たえ違つことを言ったとて逃すつもりはないのがわかりきっている態度で、少年は自分の腕と同じほどの長さの剣を構えた。少年の隣で、同行している少女は怒りに顔を歪めながら、それでも少し怯えたように彼を見つめている。

しかし、怒りを向けられている本人は気にも留めていなかった。

「それより、言葉が通じるなら……ここはどこなんだ？」

正直、目の前の二人が怒っている理由はわからない。竜がどうのと言っていたけれど、竜なんて意識した事もない生物で、実際に見るまで実在しているなんて思ってもいなかった。

少年の問いかけに答える素振も見せない不審な少女を、ドラゴンは静かな瞳で見つめ続けている。それに気付いた少女が、もしかしたらこのドラゴンが一番冷静かもしれないと思い、どうするかと考えた。そして結果を行動に移すまでの時間はほんの十数秒だった。

「お前、もしかして人の形がとれるんじゃないのか」

ことりと首を傾げて真っ直ぐに見ている少女に驚き、敵意というよりは殺意を向けていた二人は咄嗟に振り返った。けれど、そこに佇んでいるのは一頭のドラゴン。

「逆に言えば、その二人が今のお前と同じような姿をしている、とか」

思いつく、可能性という可能性を述べていく。

「ドラゴンを狩りに来たとか言っていたが、つまりお前達はドラゴンそのものか、ドラゴンを守る立場にあると仮定して……ああ、なるほど。それで……私が丸腰なのにも関わらず、害を及ぼしに来たと思ったという事か？正直なところそれは迷惑な勘違いだが」

顎に手を当て、少女は思案顔。対して、唐突に現れた二人と一頭は少し戸惑っている。先程までよりは気配も穏やかなものになって

いるが、それでも次々と仮定を述べる少女への警戒は緩めない。

「あとは……私の経験から言えば、他に思いつく事といたら、住处を荒らした者を追っている最中だとか、正式な手続きをしていないのに乗り込んできた無礼者を追い払うだとか、閉鎖的な環境にあるために、排他的だとか……あとは、人間に対して、自分達に害をなす者だという決め付けをしている、人間ではない者だから……とか、だな」

そこで、少女はすっと視線を投げた。二人と一頭の様子を見ると、どれかが当て嵌まったようだ。

厄介な。

「どれかが当て嵌まったみたいだな。それならこちらも事情を話さないといけないか。問答無用で攻撃されるのは嫌だし」

じつ、と視線を据えられて、少年は少し居心地が悪いらしい。

「……僕は自分の役目を果たしに來ただけなのに、なんでこんなに居心地が悪いんだよ」

「……どうしてか圧倒されるのは私も一緒」

少年と少女の間では会話が繰り広げられているのだが、不審者扱いされている少女にはそんな事はわからない。

「私はついさつきまで、市にいた。久しぶりの外出だったから思い切り楽しもうと思っていた。それで連れに声をかけようとしたら、何故か目の前には空があつて、周りを見てみたら森だった。いつのまにか倒れていたらしい。何故ここにいいのか、自分にはわからない。ここに來た理由を言えという質問には答えられないし、目的はと言われたら帰ることだな」

ドラゴンどうのより、地図が欲しい。最後に彼女はそう付け加えた。

あまりにあっさりとドラゴンに関心はないと言われて、怒るべきなのか安心すべきなのかと、二人は反応に困った。ドラゴンは相変わらず鳴声一つ漏らさず佇んでいる。

「それにしても、その竜はおとなしいな。いや、ドラゴン、と呼ぶ

べきか？まあ、お前達が言うドラゴンというのが、その生き物だと断言するだけの材料が私にはないんだが」

別世界かもしれないし、という一言だけはなんとか飲み込んで、少女はじつとドラゴンを見つめた。

すると唐突に、ドラゴンがのっそりと一歩踏み出した。

「ちょ…っ」

「どうしたの！？」

少年と少女が慌てるのも構わず、ドラゴンは一歩、また一歩と少女に近づいていく。けれど少女は逃げる素振も見せず、かといって攻撃するような素振も見せない。ただじつとドラゴンを見つめている。

『この声が聞こえるか？』

『聞こえるな。それがお前の声か？』

試しに、と投げかけた質問に答えが返り、ドラゴンは正直なところ驚いた。まさか聞こえるとは思っておらず、聞こえたとしてもきちんと返されるとは思っていなかった。

『見ての通り私は丸腰で、本音を言えばこんな所に止まっていなくてさっさと帰るために何かしらの策を講じたい。そうでなければ飲み水や食べ物確保しないと、いつ日が暮れるのかも私にはわからない。もしここが私が知っている国なら、自力でなんとかする。お前達には信じられないだろうが、私はドラゴンの住処や価値には関心がない。人型をとれるかとれないかも、実際はどうでもいい。なるべく早く戻らないと連れが煩いし、家族が心配する。だからできれば』

ちらり、と少年と少女に視線をやって、もう一度ドラゴンを見つめる。

「この国の名を聞きたい。もちろん、この場所がある、人間の国の名だが」

当然のように要求を突きつける少女。

それにどう返すべきかと、一同は悩む。けれど。

「人間の気配がするから念のために来てみたら、お前か」

呆れたような声と同時に、背後から尋常でない速さで何かが襲い掛かってくる。咄嗟に横跳びに避けた少女と同時に、ドラゴンは上空に逃れ、少年と少女はそれぞれ木の枝に避難した。

全員が次の動きに意識を向ける。しかし、突然襲い掛かってきた何かはそれ以上の攻撃はせず、その場でぴたりと動きを止めた。

それに、それぞれが驚きをあらわにする。

「……精、霊？」

呆然と呟いた少女を一瞥し、その何かは人間の少女に性質の良くない微笑を向けた。

「そんな格好なまりをしているから、誰かと思った」

笑顔を向けられた方は、その言葉と同時に嫌そうな表情を隠しもせずに低く唸った。

「……お前に会うくらいなら、その二人に攻撃された方がはるかにまじだった」

言いながら更に不機嫌な顔になっていく少女を面白そうに襲撃者は見ている。居合わせた二人とドラゴンには不可解な光景でしかない。

「差別は良くない」

言いながら、するりと少女に腕を絡ませる襲撃者を、少女は眼光まで鋭くして睨みつけている。

「種族で差別した覚えはない」

お前だけだ。

「私にだけその態度というのは、つれないなあ？」

「お前に親しくしようとする気があるというなら、まず自分から態度で示せ。お前の言葉を鵜呑みする気はない」

「おや、まあ。精霊の私にそこまで強気に出られるとは、大した身分だな？」

瞬間、少女の纏う雰囲気氷のように凍てついた。思わず二人とドラゴンの動きがギシリときこちなく止まる。

本能が、動くなと言っていた。

「私はお前のその言葉が気に入らない。身分だとか力だとか、お前はいつも他者と自分を比べるような事しか言わない。私はそれが大嫌いだ」

そして、いつもは自分が絶対者であるように言い、振る舞い、強者であると知らしめようとするのに、いざそのように接されると酷く傷ついたような顔をする。

自業自得のうちには、手は差し伸べないと決めているから、少女は彼の手助けをしようとはしない。そして、例えば自分が死にそうになっても彼の力だけは借りないとも決めている。

それを、この精霊自身も知っている。けれど改めようとはしない。だから、少女はなおさら自分から歩み寄る事はしない。

そんな事情を、当人達以外が知るはずもない。

「そうか。はつきりと言われたのは初めてだが…まあ、想像はついていたからな。それでお前はこうしてこんな所にいる？」

来た。

「こんな所？」

どこにいようと自由だろう、というように視線だけで訴えると、精霊はくくつと声を漏らした。

「カーテレス国の最北端の山。しかもこんな奥の奥に。お前、お供はどうした？」

現在位置が知れた。知己に会った事からここが元々いた世界なのだとはわかってはいたけれど、彼は居場所を決めていないからどの国かはわからなかった。これで、言葉が通じた理由もはつきりした。

「お供じゃない。連れだ」

更に冷ややかに返されて、精霊はそろそろ引き際かと考える。

「そうだったな。すまなかった」

「…何度も言うが、お前の謝罪は謝罪じゃない」

それには片眉を僅かに上げて、少し不服そうに彼は返す。

「本来精霊は人間に媚びへつらうものでも親しみを持つものでもな

い。更に言えば人間や他の生物……そう、例えばそこにいるドラゴンに敬われる存在だ。お前が異質なのだと、何度言えば理解する」  
そう言われて、少女は態度を改めるところか呆れたようにため息をついた。

「生憎と、その変わり者に懐いている奴が複数いるんでな。むしろ変わるなど泣きつかれたくらいだし、そうでなくとも最初から変わるつもりもない。文句があるのなら『あいつら』に言うといい。他の連中の苦言は聞く気はないが、あの二人や、その仲間の言葉なら聞いた上で考えるが？」

ふつと、不敵に笑む少女を見て、精霊である彼は諦めた。

最初から本気で言ったわけではなくて、ただの意趣返し。自分だつて目の前の人間が今までの態度を崩してしまうのは嫌だから。そしてそれをきちんとして理解しているから、目の前の、可憐としか表現できない容貌の持ち主は不遜な態度で言い切るのだ。

それに、少女の言う『あいつら』に楯突くような度胸は、生憎と持ち合せていない。

「……言ってみただけだ。わかっているくせに容赦がないな、相変わらず」

「お前が相変わらず下らないことを言うからだ」

けるりと返して、少女は自分に纏わりついている精霊を引っぺがした。それをぎよつとした顔で二人が見ている。気がつけばドラゴンは二人の傍らに下りていた。

「……精霊を素手で触れるのも、人間の中ではお前くらいしか知らないな」

「他にも何人かいる」

ギロリと睨まれて、精霊は降伏のポーズをとった。それにまた二人がギョツとしているのを見咎めて、少女は不機嫌そうに二人とドラゴンを見遣った。そして敏感に気付いてぴしりと動きをとめる二人に、今度は不可解なものを見るような視線を向ける。どうして動きを止めたのか察したドラゴンと精霊は、気付かれないように苦笑

いを浮かべた。

が、それに少女が目敏く気付いた。

「何がおかしい。『スイコ』」

「!……お前、ここで名を呼ぶのは卑怯じゃないか?」

「名前は呼んでこそ名前の意味があるんだろうが。それともなんだ、お前の大好きな奴から貰った名前が不満か?」

にやり、と、珍しく性質の悪い微笑を浮かべる少女に、スイコという名の精霊は完全に降伏した。

遊びすぎて機嫌を損ねたか。

基本的に寛大な性格だから、今日もある程度は遊べるだろうと思つて姿を現したのだけれど、どうやら失敗だったらしい。

ふと、何かに気付いたように少女が「あ」と声を漏らした。反射的に全員がそちらに目を向ける。

「忘れていたが、今回の外出の連れはそいつもいたんだつた」

言われた事が瞬時には理解できず、スイコは暫し固まっていた。しかし、徐々に言葉の意味を理解し、理解していくのに比例して顔色が悪くなっていく。

それを見ながら、少女は「精霊でも顔色の変化はあるんだな」などと、他人事だからと暢気に構えていた。

だが、青を通り越して白くなった顔色に、さすがに少女が厳しい目を向ける。

「どうした?」

その言葉がきっかけか、スイコはがしつと少女の両肩を掴みですいっと顔を近づけた。彼の、綺麗だが鋭い容貌が視界いっぱいに広がって、少女は眉根を寄せる。

「……なんだ?」

「……お前を早く帰さないと、恐ろしい事になる」

「まさか」

「お前は周りからどれだけ思いを向けられているか理解していない」!

「……それはよく言われるが、お前がそこまで蒼白になる事じゃないだろう。自力でなんとかする」

「お前の部下はどうなる！」

「……優秀だからどうとでもなるさ」

「お前にしか出来ない事がたくさんあるだろう！」

普段は泰然と構えている精霊から怒鳴られて、少女としてはいい気分ではない。しかし少女以上にこの場にいたくないのは少年と少女とドラゴンである。離れようにも、自分達が崇めている『精霊』という存在が目の前にいるために、それもできないでいる。

「それは仕方がない。別に好き好んでここにしているわけじゃないし、そうだな……仕事をしているというよりは、私が急にいなくなつて搜索でもしているんじゃないのか？」

しらつと告げる少女に、スイコは危うく怒りが過ぎて倒れそうになったが、なんとか堪えて言葉も押し込める。言いようのない感情のせいで俯き、肩がふるふると震えている。それを、少年と少女とドラゴンは更に数歩の距離をとつて見守っている。

客観的に見ていると、なんだか精霊が遊ばれているように思えてきた。

自分達は自然が大切に不可欠で、その自然の象徴ともいうべき精霊を太古から崇めてきた。

崇めてきた、のだけれど……。

「……精霊を手玉にする人間、なんて、聞いたこともないわ……」

「どうやら知己のようだが……」

『それにしつて、あの精霊殿の反応は尋常じゃない気がするんだけど……』

漸く冷静に状況を把握できるようになってまず思ったのは、あの人間の少女、只者ではない、という事。

最初こそ襲撃という形で驚かされた精霊の彼だけれど、お互いに厳しい言葉を投げながらも敵対しているわけではないらしい。さらに会話から、精霊の彼に『名前』を与えた存在が少女の外出の連れ、

であるらしい事がわかった。しかもその名前を少女が知っている事から、精霊の彼が少女に危害を加えられるはずがなく、また加えようものなら立場が悪くなる事が明らかとなった。

そうなれば、精霊を崇めている自分達も、あの少女に手出しはできない。

精霊の不興をかう事は避けなければならないからだ。

彼の登場の前に危害を加えずに済んだ事に良かったと思うべきなのか、彼が登場しなければ排除できたのに、と思うべきなのか、今の彼らには判断できない。

「それからお前の名前の件だが。贈り主からこう言われている」

え、と精霊が驚いたように少女を凝視し、ドラゴン達も耳を傾けた。精霊の意識が向いているのを確認してから、少女は口を開く。

「『彼が度を過ぎた事したら、遠慮なく名前を呼んでやって下さい』と、笑顔付きで」

それもお前に名を贈った直後に言いに来たぞ。

一言付け加えて様子を見れば、呆氣にとられたスイコが目の前にいた。

まあ、ただ一人と決めた主にそんなにあっさりと自分の名前を他者に暴露されて、あまつさえ自分の判断で自由に名前を呼んでもいいと言われていたなんて、信じたくはないだろうな。

しかし、彼の主は悪気があったわけではないし、これがスイコでなくてもきつと同じ事を自分に言ってきたと思う。と、少女は思ったけれど、せつかくだからと黙っていた。

意地悪ではなくて、単に「躡けられる時に躡けなければ」という心理からだ。少女からすれば、精霊の彼でさえ躡の対象になるらしい。意識はほぼ保護者だ。

「だから、苦情は贈り主に言ってくれ」

無情にもすっぱりと言い切り、少女は肩に流れる髪を払った。その仕草に、うちひしがれていたスイコが気付いたように尋ねる。

「…そういえば、その格好は……？」

「変装」

「それはそうだろうか……何故？」

「……監視役からの条件だ」

「……監視ではなく世話役だろうか？」

「監視だ」

むす、と途端に不機嫌になったのを見て、スイコは困ったものと額に手をやる。

奔放な性格だから、皆が振り回されて少女の動向に気をつける。結果、本人はそれを不自由だと感じる。だからたまに約束を破って脱走し、皆がまた振り回される、という悪循環。

「……私はまだお前の捜索に加わった事はないが、皆は相当心配していると思うぞ」

「そうだろうな」

それくらいの自覚はある、と素っ気無く答えが返ってきた。スイコは意外だ、と思う。

「それなら、早く帰ってやれ」

「帰ろうとしていたんだ。そうしたらその二人とドラゴンと、お前が現れた」

つい、と視線を動かして順に見遣り、最後に精霊へと視線を固定する。

「……なるほど？迷子か」

「あえて否定はしないが、その表現は気に入らないから却下だ」

「おや、と思いつつ、スイコは「わかった」とだけ答えた。

「さて、それではどうするか。飲み物や食べ物、あとは寢床を確保しないとならぬだろうか？」

人間の生活についての知識などあまり持っていないので、彼はそう尋ねた。それに少女は無言で頷く。

「そうだな。しかしそれも……」

「ちらり、と二人とドラゴンに視線をやる。

「彼らが黙って行かせてくれれば、の話だな」

「彼ら？」

それまですっかり存在を忘れていたのか、精霊の彼は「ああ、彼らか」と納得したように答えただけで、少女の次の行動にしか注意していない。

少女はと言えば、そんな彼の行動にため息をつきたい衝動に駆られたが、あからさまなので堪えた。

「結局、お前達にとって私は領域を荒らした者、という扱いなんだろう？黙って行かせてくれるのか？」

行かせてもらわなければ困るが、こっぴど尋ねたのは不可抗力とはいえ領域に侵入したのは自分で、更に言えば、後々までこの問題を引きずって周りに迷惑をかけるのは避けたい、という心情が働いたためだ。

尋ねられた方といえば、ここで見逃すのも連れて行って尋問するのも、どちらも躊躇っていた。

「……どうしよう？」

「……私達じゃ判断できない……わよね」

『上の指示を仰ぐのが適当だろうが……少し躊躇させられるな』  
飯にも精霊とあのような会話が出来るくらいには親しい人間。話を聞いていてなんとなくわかった事だが、あの精霊は名の贈り主に心酔しているようだ。そしてその贈り主といえば、あの少女に相当入れ込んでいる。

本来ドラゴンは精霊を崇めるような立場ではないのだが、自分達の種族は違う。かつて精霊に一族の危機を救われたという事実があるのだ。まして、精霊は自分達が生きていくうえで必要な自然の象徴。

しかも、精霊は本来、人間にもドラゴンにも、聖獣にでさえ姿を見せない。

「……それに……」

「？どうかした？サトラ」

『いや…なんでもない。それよりどうする。連れて行くのか？』

『え？うーん……今のところ、連れて行く事になっても抵抗はしないように思っけど』

ちらり、と少女の様子を窺えば、彼女は静かに二人とドラゴンを見つめている。隙を見て逃げようとしている風でもない。例え逃げようとしたところで、ドラゴンの飛行能力より速く移動する事は不可能だけれど。

『……そうね。いざとなれば名で拘束すればいいわ。人間には効かないでしょうけど、一族の秘術を用いれば、もしかしたら』

『……さすがに人間に対して、秘術は使ってはならない、なんて言わないだろうしね』

禁術であろうと、用いる事に躊躇いはないだろう。それほどに自分達の一族は人間を嫌いぬいている。いつ籠が外れて人間の町を、国を襲うかもわからないほどには。

(……まだ話がかかないのか……?)

二人と一頭の様子をみつめながら、少女はぼんやりと思考の海を漂っていた。あのドラゴンらしき生き物の姿を、昔どこかで見た気がするのだ。あれほど大きくはなかったし、色も違ったように思う。そう、確かあれは両手で持ち上げて腕に抱え込めるような、仔猫のような大きさで、目の前のドラゴンの硬そうな皮膚とは違い、見た目よりも撫で心地のいい柔らかさだった。

目の前のドラゴンとは違って、角は一本でガラスや氷のように透き通っていた。真珠やオパールの表面のように、角度によって様々な色が見え隠れするような不思議な角。

もう何年も会っていない。一時期だけ一緒に過ごした不思議な生き物。今どうしているだろうか。もしかしたら、あれも目の前の生き物のように『ドラゴン』と呼ばれるものなのだろうか。

(……いや、考えたところで、もう会うこともないだろうし。……かわいかったからもう一度撫でたいけど)

懐いてそばを離れなくて、ちょこちょこついて来たり、飛べるようになったらばたばたと一生懸命翼を動かしてついて来たり。

(……かわいかったが、周りが驚いてじつと様子を窺っていたから、少し居づらくもあつたな)

ああけれど、本当に目の前のドラゴンのような姿だった。もしかしたら別の種族のドラゴンなのかもしれない。

(もしこの山にいるのなら、帰るまでには一目会いたいな。まあ、そんな偶然、あるはずもないけど。それに、覚えているかもわからない)

ぼーっと過去の思い出に浸っていると、くいと髪を引っ張られた。振り向けば、精霊の彼が怪訝そうにこちらを見ている。

「……なんだ？」

「いや、少しぼうつとしていたみたいだったから」

意識を戻そうかと思つて。

それで髪を引っ張るか?と思いつつ、少女は礼を言った。自分のこれからが決まるというのにぼうつとしている場合ではなかった、と反省したからだ。

「それにしても、長いな」

「仕方ないだろう。しかし、確かにあの種族は精霊を崇めているという変わった種族だから、私がついていけばそれほど悪いようにはされないだろう」

「……ついてくる、と?」

「何か大変な事になってお前だけで解決できない事になつてもいい。もしくは、後で私があの方に叱責されても構わない、というならこのままここで別れるが?」

「……つれていけばいいんだろう」

「その通り」

気を遣っているのかそうでないのかわからない言い方をするが、結局は自分の身を案じているのだとわかってしまうので、少女は仕方なく了承した。

「しかし、力は借りない」

「何故?」

この場合は仕方がないだろう、と考え彼は問い返す。それに少し考える素振を見せてから、す、と顔の横に手を持ってきて、少女は右手の中指に嵌められている指輪を見せた。

「『彼女』が同行している」

「……気付かなかった……」

しまった、というように渋い顔をし、そして次にはがっくりと頂垂れた精霊に悪いと思うが、それでも今は仕方がないのだ、と自分に言い聞かせる。

「おとなしくしてくれ、と頼んだから言葉通りにそうしてくれていたんだろ。彼らが現れてからはまともに会話もしていない」

つい、と視線を二人とドラゴンに戻す。それに倣うように彼も視線をやった。話し合いはまだ続いているらしい。

「それならば、お前もおとなしくしているようにな」

「…何故」

「おそらく、彼らはお前をつれていくだろうから。不審な動きはしない方がいい」

「………わかった」

不承不承頷く少女を見て、精霊は思わずため息をつきそうになってしまった。この少女に振り回される人々や、人間でなくても傍に居続けている者達が少し不憫だ。

さて、と彼は気を取り直してドラゴン達の様子に注意を向けた。

（うまくいけばこいつの側に取り込めそうだが、取り込んだら取り込んで色々弊害が起こりそうな気もするな）

自分の主を思うなら彼らは取り込んだ方が都合がいい。しかし、彼らにも掟やらしがらみやらが付き纏うに違いない。それならば、彼らの拠点に赴いて様子を見てから動くしかないだろう。

人間は好きではないが、目の前の人物は例外的に好感を持っているから。

ここは一つ。

画策してみるか。

まさか自分達のすぐ傍で、自分達が崇拜している存在がそんな事を考えているとも知らない彼らは、未だに相談を続けていた。

『で、結局どうすんの？』

『やっぱり連れて行くしかないかしら』

『これで連れて行かなければ、何を言われるかわからない』

『……そうね。もしかしたらもう様子を知られているかもしれないし……』

様子見の術でも使われていたら、こうしてここで時間を費やしている事にも何か言われるかもしれない。

その危惧はあたっている、とサトラは思った。きっとこの機会を逃しはしないと。

『…なら、連れて行こう』

『そうね。そうしましょう』

『それなら、名前を聞かないとね』

枝から下りて近づくと、精霊の方が僅かに警戒したようだったが、本人は平然としたまま見つめている。観察しているというより、ただ見ている。そんな視線。

その様子に不可解さが増したが、この精霊がいるのならば長老達も、たとえ精霊に対しての敬う気持ちが薄れているといっても下手な事はできないはず。

勝手に暴走されて、その害を被るのは嫌だから、という事で、自分達は少女に害が及ばないように立ち回ることにした。

それを簡単に説明すると、拍子抜けなほどにあっさりと少女は承諾した。

「別に無闇に攻撃されないならそれでいい」

「……本当にいいの？」

「いい、と言ってるが、不満か？」

ことりと首を傾げて不思議そうに尋ね返されて、正直なところルマは戸惑った。

「い、いえ。私はルマというの。貴方は？」

へえ、先に名乗るのか。

感心して、お目付け役の言い付けを破らないように注意して少女は答える。

「私はトモと呼ばれている。別の名で呼ぶ者が多いが、それは私の名ではないからこちらで呼んでくれると有難いな」

「？あだ名か何かなの？」

首を傾げるルマに、トモはこくりと頷く事で答える。

「ついでに言えば、その名で呼ぶなと言って聞き入れる輩が少ないというだけだ。この精霊だって私をその名で呼ぶ。お前、これからは私をトモと呼べよ」

じろり、と睨まれて、スイコは諦めたようにため息をついた。

「わかった。わかったから睨むな、トモ」

「その学習能力が途切れない事を祈ろう」

平然と辛辣な事を言つてのけるトモに、ルマと同行していた少年は呆氣にとられた。

「……けっこう、図太い？」

「そうだな。それで、お前達は？」

「お前、とか言わないで欲しいんだけど？」

不満そうに見れば、トモは平然と返した。

「名前がわかれば名前で呼ぶさ」

「……貴方、男の子みたいな……それもぶっきらぼうな話し方をするのね」

「仕方がない。もともとこうだからな。外見と比べての違和感が平気なら、一人称も私ではなく俺にするが」

ただ、万が一にもお目付け役にはれた時が面倒だけれど。

「……話し方を女の子らしくしてくれる方がいいんだけど」

「それは無理だ」

きっぱりと拒否する姿に、ああこれは外見とは違ってかなり頑固な性格だ、とルマ達は悟った。

「……ま、別にいいんじゃないの。そうそう、僕はテリー。で、こっ

ちのドラゴンが」

「サトラだ」

一瞬にして姿を人の形にしたドラゴンが、自分で名を告げた。その様子を見て、トモは考える。

（自分で名乗るか。外見で判断するのは好きじゃないが、一番冷静に立ち回れそうなのはやっぱりこいつだな）

口調といい外見といい、静かに皆の動きを見ていた事といい。

害をなす存在だと彼に思われなければ、最悪な事にはならないだろう。そう結論付けるとトモはにこりと、僅かにだが笑った。

「そうか。ルマ、テリー、サトラ、だな。判断は上任せになるとは思うが、よろしく」

自分がどう扱われるのか漠然とでもわかっている様子に、三人は一瞬言葉に詰まる。

「…よろ、しく」

テリーが少し後ろめたそうに言うが、トモはまったく気に留めていないらしく、再びにこりと微笑んだけだった。

「結局、ついていくんだな？」

「ああ、そうする」

「それなら、私も行く」

え、と、三人は精霊を見た。ついて来るかもしれないと思っていたが、こうもあっさりとそれを言うとは。

「おおかた予想はしていただろう？それとも私が行ってはいけなと？」

「い、え…そんな事はありませんが」

「それなら、いいだろう？」

うつすらと微笑を浮かべるのに、ルマは再び戸惑った。困って残りの二人を見る。

「…いいんじゃないの？」

はあ、とため息をついて言うテリーに背中を押される形で、ルマは了承の返事をした。それに満足そうに頷いた後、精霊はもう一つ

と言って質問をした。

「お前達は何を食べている？トモは人間だから私とは違って食物を摂取しなければならぬのだが、食べられそうな物はこの辺りにあるのか？」

言われ、そういえばと三人はトモを見た。

「私達は雑食だけれど、あまり果物や穀類は食べないわね。魚とか、動物とかが主よ」

「そうか。人間も雑食だが、穀類も果物も肉も魚も野菜も、自分達にとってバランスがいいように摂取しないと、病気になるな。場合によっては、死ぬ」

さらりと告げられて、三人は再び言葉に詰まった。

それはつまり、下手をすれば食べ物だけで死んでしまうのだという事で、害意を加えないつもりなら食べ物にもある程度は気を配らないとならない、という事だ。

本人にはそんなつもりはないのだろうが、忠告のようなものだ。

「精霊は何も食べなくてもいいんだから、便利だな」

「清浄な場所だからこそだ」

穢れのあるところの気など糧になどならない、と嫌そうに言う精霊に、そうかと軽く返しているトモ。

この両者の関係はそれほど親しいものではないはずなのだが、今はどう見ても親しそうに見える。関係がよくわからない。

ふと、サトラとトモの視線がかち合った。きよとんとしたのも一瞬で、トモはすぐに不敵ともいえる微笑を浮かべた。

それに、サトラの中で警鐘が響く。

「一つ、言っておく事がある」

「…何を？」

構えているのがわかっていのだらう、トモは苦笑した。そうして表情をもとの柔らかいものに戻すと、再び口を開いた。

「私はまだ死なない。いざとなれば私の擁護に回らずに、自分の事だけを考えるといい」

「…っ！」

自分達の背景を、知っている筈がない。  
筈がないのに。

「囚われの身になるのは、初めてではないからな」  
そう言っつて、トモは今までと同じように微笑んだのだった。

## 第一話

もう太陽も姿を隠そうかという時間になって、宛がわれた洞穴に果物が運ばれてきた。

「……これを食べるといふ事か？」

軽く山のように積まれている果物は、どう見ても一人で、一食に食べる量ではない。

「ええ、一食分。足りない？」

「いや……」

その逆で多すぎる、と言いたいのを堪えてトモは礼を言った。

「しかし、重くなかったのか？」

彼女のような細腕ではとても運べるようなものではないし、例え力持ちの男性でもこれはかなりきついのではないか、とトモは思ったのだけれど、返された答えはあっさりとしたものだった。

「あら、ドラゴンは力持ちなのよ？」

くすりと笑われて、トモはそうかとつられるように微笑んで返す。外見のせいか、ルマはわりと気を許してくれているようで、ここに連れて来られてから実に甲斐甲斐しく世話をしてくれる。

「ところで、ルマが私の世話をしてくれているのは、私が女だからか？」

「それもあるみたい。他は……ちょっと、人間嫌い、だから……」

自分はトモの性格を多少なりとも知っているから、世話役に選ばれても文句は無かったが。

「そうだな。サトラはまだわからないが、テリーもかなり人間嫌いだろう」

「……そうね」

初対面があれだったから、そりゃあわかるわよね、と心の中でた

め息をつきながらも、ルマはトモに食事を勧める。

「スイコはどうしてる？」

「……長老以外の方々の歓迎を受けて少し辟易なさってるみたい……」

あはは、と誤魔化すように笑うルマの様子に、トモはなんとなくだが想像できた。

ちらりと、周囲の様子を探る。怪しい気配もなければ音もしない。

「ルマ」

「なに？」

素直に返事をするあたり、彼女は元来素直な性格なのだろう。しかし、人間が相手という事で、トモと対峙した時はあれほど怒っていたのだ。それほど人間は嫌われているのだろうか。

「ここに、防音は施されているか？」

「え？どうということ？」

「この音は、外に漏れないか」

「……ああ、大丈夫、だけど？」

なんだろう、と思っただけで聞き返すと、トモはルマににこりと笑いかけた。それにルマはぼつと見惚れてしまう。

彼女達は知る由もないが、トモはもともと無表情で、愛想笑いもしない。無表情、無愛想、ぶつきらぼう。それでも第一印象で悪感情を抱かれないのは、その容姿故だというのは、本人だけがわかっていない。そして、笑えばそれだけで種族を超えて好感をもたれるという事も。

「お前達、その長老と確執でもあるのか？」

「え……」

びき、と動きが止まった事でそれを肯定しているのだが、ルマは気付いていない。言われた事に驚きすぎて、どう反応したらいいのかわからないのだ。

「図星か」

さらっと断定して、トモは飲み物の入った器を手に取り、中の液

体を味わう。

(ほのかに甘い…これは美味しいな)

「な…んで、わかつたの？」

「わかつたというより…そうだな、私がここに連れて来られた時モ姿を見せなかつたし、今も『長老以外の方々』と言っていただろ？お前達が長老と折り合いが悪いというより、長老が他の仲間と折り合いが悪いんじゃないかと思ったんだ」

言いながら、トモは作り上げたばかりの即席ナイフでさつくりと果物を切っている。薄くは剥けないが、皮もできるだけナイフで削ぎ落としていく。

「人間って、そうやって果物を食べるの？」

「ああ、果物の種類やその人の好みによって食べ方は異なる事もあるが、たいていのものはこうやって皮を剥いて食べる。洗った後に丸齧りしたりもするし、場合によっては煮たり干したり、焼いたりな」

「へえ…美味しそうね」

興味津々で話を聞いているルマの様子を見て、今手元に干し果物やジャムがあれば食べさせてやる事もできたのに、とトモは少し残念に思う。

「ああ、美味しい。手元にあつたら食べさせてやる事もできたんだが、焼くのはともかく、煮たり干したりした物は買っていたから、作り方もわからないし、ここに道具もないだろうしな。少し残念だ」

そうは言いながらもしよりしよりと皮を剥いて、そのままぱくりと果物を食べる様子にルマは首を傾げる。

「トモは、生でも食べるの？」

「そうだな。どちらかというと、生で食べたり絞って果汁を飲んだりするのが好きだ」

「へえ。魚は？」

「塩焼きが好きだが」

「塩焼き？」

「ああ、岩塩を細かく砕いたものを振りかけて、焼くんだ。新鮮なものなら刺身でも美味しいが」

「さしみ？」

「生の魚を捌いて、身だけを皿に盛り付けるんだ。そうして薬味を添えて、タレにつけて食べる」

「……タレ？」

（ああ、タレもわからないか。そういえば最初は料理長も刺身はわからなかったっけ）

「ああ。でも、その食べ方をするのは、私がいた場所では私だけだったな。他の奴は生魚なんて食べられない、って逃げ惑って」

美味いんだがなあ、と呟くトモを、ルマは笑いを堪えて見ていた。  
「他には？」

「他か？他……ああ、肉は必ず焼いたな。別の場所で暮らしていた時はきちんとした調理法に則って生で食べた事もあったが、今暮らしているところでは必ず火を通して。塩なんかの調味料をかけたりにして……ああ、調味料というのは、味をととのえる物で、好みによって色んなものを使い分けるんだ。あとは野菜と一緒に調味料を加えて煮込んだりしたのもあったし、炙ったりもしたな。たまに燻製とか」

そう言っつて、剥いていた果物の最後の一切れを口に放り込む。もぐもぐと咀嚼して飲み込んでから、再び口を開く。

「で、果物は食後にちよつとつまむ程度で、主食ではなかったな」

「……ごめんなさい」

「気にしなくていい。食べ物があるだけ有難いし」

そう言っつてから、もう一度飲み物を飲む。

「それにしても、これは美味しいな」

「あ、それ美味しい？良かった。それ、果物の絞り汁なのよ」

「そうなのか？でも、こんな味のもの食べた記憶がない」

首を傾げるトモに、ルマは少し誇らしげに種明かしをする。

「それ、この山にしか生っていないものなのよ。だから、多分人で

口にした事があるのは少数だと思うわ」

意外な事実に驚いて、しかし嬉しさが勝ったトモは素直にお礼を口にする。

「……そうか。ありがとう」

そのまま自然な動作でトモはルマの頭を撫でた。

予想外な行動に、ルマは目を見開いて硬直する。それに気付いていないのか、トモは満足そうに頭を撫で続けている。

「……何、してんの？」

「ああ、テリーか。精霊のもてなしは大変だろう。お疲れ」

ルマの頭に手を置いたまま、トモはにこりとテリーに笑いかける。洞穴に入っただけで目に飛び込んできた光景に面食らっていたテリーは、さらに困惑する。

「……こどもじゃないんだけど」

ぼそりと言ってみるが、トモは不思議そうに首を傾げるだけで、ルマの頭から手を離そうとはしない。

「そうか。人の姿をとっているからわからないが、お前達はいくつなんだ？」

外見どおりの年齢でない場合が多いというのは理解しているらしい。

「……生まれてから、十六回季節が廻ってるけど」

「じゃあ人間で言えば十六歳か。私よりも年下だな」

なら、これはおかしくない。と言って、トモは再びルマの頭を撫でた。撫でられているルマはといえば、呆然としているのかおとなしい。

「……年上？」

「なんだ、信じられないか？まあ私の実年齢をばらす気はないが、少なくともお前達よりは年上かな。二十歳はこえているから」

くすりと、面白そうに見てくる視線に耐えられず、テリーは目を逸らした。

人間を見た事は少ないけれど、この少女はまだ十五、六ほどにし

が見えない。だからルマを子供扱いしているのがおかしい行動に見えるのだけれど。

「お前の頭もなで心地が良さそうだな」

じいっと見られて、テリーは無意識に後ずさる。

嫌な予感。

「こつちに来い」

来い来い、と手招きされ、テリーはどうすべきか判断に困って、視線を宙に泳がせる。しかし、それでもトモは諦めるどころか更に楽しそうな様子で来い来いと手招いている。

どうしよう…。

「ついでに、後ろにいるのも一緒にな」

「！！」

「え？」

ぎし、と硬直してしまったテリーの後ろ、影になる部分に足が見える。ルマがそのまま視線を少しずつ上げていくと、そこにはよく知っている顔があった。

「……サトラ？」

彼女の視線の先に、動きを停止してしまった兄と弟の姿がある。

二人とも次の反応を選びかねているようだ。

「……」

「で、二人揃って、様子でも見に来てくれたのか？」

ん？と不思議そうに首を傾げるトモは、自分がどれくらい大変な事を言ったのかわかっていない。

「どうした？ああ、そういうえばお前達の種族は雑食なんだつたな。ちようどいい、私だけでは食べきれそうにないから手伝ってくれな  
いか」

そう言うと、トモは二人の様子を不思議に思いながらも果物の皮を剥き始めた。漸く撫でてくる手から解放されて、ルマは我知らずほっと息をついた。

『……サトラ、気配おさえてたよねえ…？』

『極力おさえていた。気付かれるとは思わなかったんだが…』

二人揃って、立ち尽くしたままトモを観察する。どう見ても、俊敏に動くようなタイプではなさそうだし、性格もどちらかといえはのんびりしているように感じられる。

でも、敏い。

「どうした？……ああ、もしかして気配をおさえていたか？」

さらりと、なんでもないように尋ねられてしまって、二人は再び動きを止める。

「心配しなくていい。ある人物から身を守る手段をいくつか教わっただけだ。身を守るだけだから、攻撃する手段は教わっていない」

その言葉に、サトラとテリーは眉根を寄せる。

「どんな環境にいたわけ？」

テリーのその言葉に一瞬きよとんとしたルマだが、すぐにトモへと心配そうな表情を見せる。それに気付いて、トモは苦笑した。

「とりあえず、私を心配する友人と部下と家族に囲まれながら平穩に暮らしていたが…たまに命を狙われたりもしたな。数えていないから、何度狙われたのかわからないが」

「ほら、剥けた」と言って果物を差し出す手を無視して、テリーはトモに詰め寄った。

「なに、しでかした？」

硬い声音と厳しい眼差しを受けて、トモはうっすらと浮かべていた笑みをひっこめる。

「別に、何も。ただ、ある立場の者にとっては、私が邪魔でしかたがなかったらしい。それなりの権力持ちなんだ、これでも」

食べ、と無理矢理口に果物を一切れ突っ込まれて、更に言い募ろうとしていたテリーは悔しそうにそれを咀嚼しだした。不安そうに見てくるルマに笑いかけてやるだけの気力もない。

多少なりとも感情を揺り動かしている二人に比べ、サトラは静かにそこに佇んでいるだけで、怒っている風でも案じている風でもない。

「私は今でもお前達にとつては不審者なんだろう。しかし、私にも言えない事がある。それは部下に約束させられた事だから言えないが、それ以外なら答えるぞ」

どうする？と真つ直ぐな視線とともに尋ねられ、サトラはルマとテリーに目で問う。それに、二人は無言で頷いた。

何も言わないという事は、質問内容は任せるといふ事だろうと判断し、サトラは静かに口を開いた。

「嘘は言わないか？」

「嘘は好きじゃない」

洞穴内に流れている小川で手をきれいにしてから、ふき取る布がない事に気付いてしかたなく水滴を振り落とす。

「もう少しこっちに来るといい。私が怪しい行動をしないか危惧しているのなら、三人揃えば少しは安心だろう？それに、いつまでも立っているのは疲れないか？」

ちよいちよい、と再び手招きされ、今度はテリーもおとなしく傍による。諦めたようなため息は忘れないけれど。その様子を見届けてから、サトラもおとなしく、ルマとテリーの間、ちょうどトモの正面に座した。

「それで、何が聞きたい？いくらでも聞いてくれて構わない」

後ろ暗い事はなにもない、とでもいうように、トモはそう告げた。その瞳を、サトラはやはり静かに見据えている。

「ここに来る前、どこにいた？」

予想していたよりも穏やかな質問をされた事で、トモは意外さなきよとんとした顔を晒した。

「どこ？……ああ、ここに来る前か…この国の首都の市だ」

市にいた事は告げてあったが、どの国とまでは言っていないかったのを思い出し、トモはありのままを答える。

「この国の首都？随分離れた場所から来たんだね」

「他の大陸に飛ばされなかつただけ、まだましだがな」

苦笑して、テリーの感想に相槌を打つ。確かに首都からここまで

はそれなりの距離があるが、魔法使いならば一般の人々よりは早くに辿り着ける。それを知っているから、トモはあまり遠いとは思っていないかった。

「あの精霊殿とはどこで知り合った？」

二人の会話が落ち着くのを見計らって、サトラは再び質問をくりだした。それにも、トモはいたって普通に返す。

「あまりはつきりとは覚えていないが、私の部下が名付けたその日に、職場で」

その言葉でスイコがトモについてきた訳をなんとなく察し、ルマとテリーは納得した。

「では、その職場では何をしている？」

そこで、ぴたりとトモの動きが止まる。動きが止まるというよりは、雰囲気だけが僅かに硬いものに变化した。

それを敏感に察した三人は、トモの表情から何かを読み取るうとでもいうように、真剣な瞳を向ける。

けれどその空気は一瞬で消え去り、すぐにトモは元通りの様子で飲み物を口に含んだ。

「書類仕事」

簡潔に言い切り、トモは誰も手をつけようとしない果物に手を伸ばした。

（今日は果物が夕飯のかわりだしな）

実は飽きてきているのだけれど、せっかく用意してくれたんだからと、トモは満腹になるまでは食べようと思っている。

「書類仕事か。…トモ」

「なんだ？」

名を呼ばれ、サトラへと顔を向けると、彼はやはり静かに見つめていた。

「お前、何故俺達が人型をとれるドラゴンだとわかった？」

はっとして、テリーとルマがサトラを見つめる。そして慌ててトモへと視線を向けた。けれども、両者はそれまで通り、落ち着いた

様子を崩さない。

「そういう能力を持っている者がいると知っていたからに過ぎないが？」

それがどうした、とでも言いたげな様子のトモを見て、ルマはくらりと眩暈を感じた。

「そんなにあっさりと言われるような事じゃないんだけどね……」

テリーは疲れたようにこぼし、自分を誤魔化すために果物の山に手を伸ばした。実はトモを連れてきてから今まで、精霊の歓迎の準備やら仲間達への事情説明やらで慌しかったせいで、まともに食べ物をお口にしていなかったのだ。

目の前にある果物の山は、ドラゴン一頭でぺろりと平らげられる程度だけれど、人間には多かったのか、とテリーはしゃりしゃりと果物を齧りながらぼんやりと思った。

彼の横では、未だに問答が繰り返されている。

「何故知っていたんだ？」

「目の前で見たことがあるから」

ただし、とトモは付け加えた。

「人の姿から、本来の姿に戻るところを、だけどな」

答えてから、しゃり、と再び一切れ口にする。

瑞々しい果物はやはり美味しい。

「それは、どの種族だ？」

びた、と、今度こそトモの動きがぎこちなく止まる。

(…そこをつくか)

侮れないとは思っていたけれど、ここまで敏いとは思わなかった。それがトモの正直な感想だ。

「それはどういう意味だ？人間とかドラゴンとか、そういう？」

その問いかけをした時点で、彼の知りたい事はおおかたわかったも同然だけれど、それでもトモはそれを聞かずにはおけない。

「その種族だ」

(…これが、気配を読める者、という事か。それならサトラは、自

分の力の強さをきちんと把握しているんだろっな)

サトラの問いと答えで、トモは一つの事に気付いた。気付いて、それを言うにはまだ早いと結論を出す。

「…それを答えて、お前は困らないか？」

びし、と今度はサトラの表情が硬くなる。それに気付いた二人が不思議そうに見てくるのに気付いても、サトラには誤魔化すための言葉が思いつかない。

「お前、きちんと話をしているのか？」

ルマとテリーに。

続く言葉は音にはされなかつたけれど、サトラにはトモが言わんとしている事が理解できた。それ故に、彼は驚愕の表情でトモを凝視するしかない。

絶句しているサトラに、それでもトモは言葉を続ける。

「平穩に過ぎたければ、不用意な事は言わない、しない。それが鉄則だ。それしか身を守る術は、ないんだろっ？」

静かに自分を見つめてくるトモに、サトラは一体何をどこまで知っているのだと叫びだしたい衝動に駆られた。

けれど。

「…サトラ？どうしたの？大丈夫？」

「顔色が悪い……一体なに？」

ルマとテリーが顔を歪めて様子を窺ってくるのに、なんとか衝動を堪える。

今、二人に心配をかけるのも、他の連中に勘付かれるのも得策ではないから。

「いや、大丈夫だ」

平気だと、二人を遠ざける。二人は変わらず心配そうに見つめてくるが、今はそれどころではないのだと、心の中で告げる。

言葉に出来ないのがもどかしい。

一際鋭さを増した眼光に、二人はそれ以上の言及は諦めた。そしてその鋭い視線を向けられているトモは、相も変わらず気の赴くま

まに果物を頬張っていた。

ゆっくりと咀嚼して、唇を拭う。

「…で。その視線は警戒の表れととればいいのか？ 言うておくが、私はお前と同じような状態にある者を知っているというだけで、危害を加えるつもりもなければ、利用するつもりもないぞ。だいたい、利用する方法なんて知らないし、危害を加える理由はない」

ぺろりと、唇を拭った指を舐める。舐めてから、手を洗った意味がない、と気付いて自分の間抜けさにため息をついた。

そしてもう一度サトラへと意識を向ける。

「お前が自分だけで聞きたい事は、後で単独でここへ来て聞けばいい。それで、他に聞きたい事は？」

とことん付き合う姿勢を見せて、トモは正面に座るサトラへと強い視線を向ける。本能的に嘘ではないと察して、サトラは無意識に安堵の息をついた。

まだ二人に話していない事を、トモの口から語られるのではないかと恐れていたのだ。

しかし、こうなるとますますトモがおかしな存在になってくる。

サトラは内心で首を傾げていた。

「…それなら、その種族との関係を尋ねてもいいか？」

少しだけ柔らかくなった声に、トモはいい傾向だと心の中で笑った。今日会ったばかりのドラゴンだけれど、トモにとっては自分のことのような感覚になりつつあった。

懸命に生きている姿は、感動させられるから。

(怒らせそうだから言わないけどな)

「それくらいなら。友達、という関係かな。最近は家族のようだけ  
ど」

にこりと微笑めば、サトラは呆気にとられたような顔をした。その意外な表情にトモは目を瞬かせたにとどまったけれど、他の二人は驚きすぎて言葉を失っている。

「そんなに不思議か？ ……ああ、そういえばそうか。怪我している

ところを拾ったら懐かれた。それだけだ」

くるりと首を動かして、テリーとルマに声をかける。

「二人とも何の事かわからないかもしれないが、そのうち詳しい事を教えられると思うから、今は聞かないでくれ。で、二人は他に気になる事はないのか？」

話を振られて、テリーは少し迷うような素振を見せた。それをトモは見逃さない。

「どうした？」

眉間に皺を寄せ、けれどテリーは意を決したようにトモを見つめる。

「この国の人間の王様って何考えてんの？」

「……は？」

何故いきなり、国の王？

そんな心の声が聞こえたわけではないだろうが、テリーの言いたい事を察したルマが補足する。

「一月ほど前になるんだけど、人間の…多分軍隊だと思うんだけど、この山に侵入してきたのよ」

「…何だつて？」

一瞬、トモの瞳に鋭い光が過ぎったが、幸か不幸か誰もそれに気付かなかった。恐らく本人でさえ気付いていない。

「居丈高にこう言ったのさ。『我らは我らが王の命によりお前達を捕らえる』って」

テリーが心底憎い、とでもいうように吐き捨てるが、トモはそれを諷めようとは思えない。誰だって勝手にそんな事を言われたら気分が悪いだろうと思う。

「で、その『王』が、この国の王だと？」

「多分ね。流石に他国の軍隊を素通りさせるような国はないだろう？」  
言われて、それもそうだと納得する。しかし、そうだとすると「この国の王が命令した事が確実になる。」

「…また、馬鹿が出たか」

ぼつりと零したその言葉を、ルマだけが聞き取った。え？と思わず零した言葉は、静かに怒っている三人には聞こえなかったらしく素通りされてしまう。

「…で。その馬鹿どもは他に何か言っていないかったか？」

眉間に皺を寄せ、不機嫌だとはつきりとわかるほどに苦い顔をしているトモを不思議に思いながらも、テリーは問われるままに答える。

「さあ。ああ、そういえば、王の希望に副えば嫁にどうのこうのって……」

「……嫁？」

なんだそれは。

「つまるところ、ご機嫌取りなんじゃない？滅多にみつからないものを差し出して、目をかけてもらおうっていう。あわよくば王に近づこうとかいう、浅はかな考えなんじゃないの？」

「……そのために狙われるドラゴンの身にもなってみる、と言いたいな」

「まあ、冗談じゃないしふざけるなって思ったから、遠慮なく追いつ返したけどね」

「死人は？」

じつと、それまで以上に強い光を宿した、けれど静かな瞳に見据えられて、テリーは一瞬言葉に詰まった。代わりに、サトラが口を開く。

「出していない。幸い魔法使いがいなかったから、強制的に山の外へ飛ばした」

なるほど、とトモは納得する。

「それで私を見た時に警戒していたんだな。魔法使いなら軽装でもさして問題はないから…」

しかし、魔法使いは必ず杖を必要とする。杖でなくても、力の制御のために何かしらの媒体を必要とするはずだ。

ただし、杖以外を使うのは、例外中の例外だけれど。それを言っ

たところで気休めにもならないだろうから、言わないが。  
どうするか。

「……お前達が素直に答えてくれたから、今まで黙っていた事を言いたいと思うんだが」

最後まで言わずにおこうと思っていただけけど、ドラゴンの集落の場所を知ってしまったからには簡単には帰してもらえないだろう事はわかるから、せめて少しでも円滑に物事が運ぶように。

そんな計算が、ないわけではないけれど。

「え？黙っていた事…？」

なんだろう。

ルマには純粹な疑問でしかないけれど、何か思うところがあるらしいテリーとサトラは警戒もあらわにトモを見据えている。

「これは、実は口止めされていた事なんだがな。どうにもお前達を見てみると、黙っているのが心苦しくなってきたがたがないんだ」

苦笑して、トモは右手を甲が上になるように差し出した。中指と親指に、意匠が異なる指輪がそれぞれ一つずつ嵌められている。

三人は、中指の細い指輪から僅かに力が漏れ出しているのを感じとった。確かな存在感のあるその力に、ルマは思わず身震いする。

(気付かなかった)

トモを洞穴に連れて来てから殆どの時間をともに過ごしていたのに、漏れ出しているこの力にまったく気付けなかった。

この力は、自分の持っている力よりも遙かに大きい。

けれど、兄と弟と比べたら、どうだろう。そう思ってルマが二人を見てみれば、二人は目を見開いているけれど、恐怖は感じていないようだ。

その様子を見て、ルマは落ち着きを取り戻した。二人がいれば、大丈夫だ、と。

そして、トモが平然と自分達について来た理由がなんとなくだがわかった。精霊の彼とこの指輪の力があれば、そんなに危険な目にはあわないという事を、トモはわかっていたのだと。

「窮屈だったろう。ナギ、出て来ていいぞ」

すうつと、靄のようなものが指輪から立ち上り、徐々に人の形を成していく。数秒後には、大きな瞳の、可愛らしい少女が立っていた。けれどその瞳は冷たくて、近寄りがたい印象を与える。

そしてその雰囲気は、一目で人外だとわかるものだった。

「…主」

咎めるような視線とともに言葉を投げられても、トモは無表情で肩を竦めるだけだ。明らかにトモが上の立場だとわかる。

「警戒されて攻撃されるのが嫌だったから、おとなしくしてもらっていたんだ。でも、少なくともお前達は私の話に耳を傾けてくれただろう？」

にっこりと、満足そうに笑われてしまったのは詰め寄る事もできない。

「彼女は私の部下で護衛で、そして家族だ。私は無事だと連絡したいんだが、彼女に言伝を頼んでもいいか？」

三人に了解を取ろうとするトモに、間髪いれずにナギが抗議する。『私は主の傍を離れません。風に乗せて言葉を運ぶだけです』

絶対に離れない、と強い意思を真っ直ぐに向けてくる彼女の希望は叶えたいが、それも目の前の三兄弟が許可してくれれば、だ。

無言で、三人は顔を見合わせる。

「……この姿で外に出られても、困るよね」  
ぼそりと、テリーが呟く。

テリーがそれを言ったのが意外で、トモは僅かに目を見開いた。  
「たしかにそうよね。突き止められて乗り込んでこられても困るし」

「……」  
ちらりと、ルマがサトラの顔色を伺う。

二人の意見に、サトラが静かに息を吐き出した。

「…ばれないように、送ってくれるなら」

見咎められないように成し遂げてくれるのなら見逃す、と言って  
くれている。そう理解して、トモは嬉しそうに笑った。

「ありがとう」

じゃ、さっそく。そう言って、ナギに伝言を頼む。

「トモは無事だ。しばらくは帰れないかもしれないからそれは覚悟しておいて欲しい。それから、もし居場所がわかったとしても大勢でおしかけてくるなよ。仕事での最終的な判断はケーサとルートに任せる」…以上だ」

ばん、と掌を合わせて、終了を告げる。それと同時にナギは右手を横に払った。すると少しだけ光る何かが風に乗って洞穴から出ていく。

「どれくらいで届く？」

『市からそう離れていないのなら、半日とかからずに届きます。…相手を指定していませんから』

「ああ、それでいい。別にケーサでもルートでも、それ以外でも」  
ただ、受け取って欲しくない相手がいないわけでもないから、できれば彼らには届かないで欲しいな、とは思う。

会話が途切れたのを見計らって、テリーが声をかけた。

「場所、言わなくてよかったの？」

「言った方が良かったか？」

人間に知られたくない場所だろうに。

トモの気遣いに気付いて、テリーは「や…ありがとう」とだけ答え  
た。

「それより、彼女の力があればすぐにでも山から離れられたんじゃないのか？」

「…あつ…!!」

「そういえば…」

サトラの問いに、ルマとテリーがはつとしてトモを凝視した。今日だけで何度こんな風に見られたか知れないな、とトモは内心で疲れたため息をついていたが、面にはそんな様子は読み取れない。

「そう思ったが、私はナギの言葉を聞いて暫く様子を見ることにしたんだ。もといた世界に出たとは限らない、と言われたから」

気がついたら山の中で、ナギの説明によれば空間の歪を經由しているから、魔法を使って移動したのとは違って、世界そのものが違う可能性がある、という事だった。というトモの説明を聞いて、三人はあまりな事に言葉が紡げないでいた。

「誰かを捕まえて現在位置を把握しない事には動けなかったからな。世界がかわっていないのなら彼女の力も使える。でも、突然力を使って姿を消したら、お前達、追ってきたらどう？」

さもわかっていっているというように言われて、気分が悪くないわけではないが、確かにトモの言う通り、役目を果たすために追いかけたらどう？」

「まあ、スイコの登場には驚いたがな。予想もしていなかったから」  
こくり、と乾いた喉を潤す為に再び飲み物を口にするトモを、三人は複雑な表情で見ている。

(確かに、言ってる通りなんだけど…)

(どうしてそこまでわかった上で行動できるの…?)

突然自分が知らないところに放り出されたら不安でしょうがない筈なのに。

その心の声があったかのように、トモは再び口を開いた。

「空間の歪を通して別の場所に放り出されるのは初めてじゃなかったからな。ある程度の免疫はある」

絶句している二人を見て、トモはさらに爆弾を投下した。

「ついでに言えば、不審者扱いされて追い回されるのも牢に放り込まれるのも経験済み。そんなわけだから、穏便に済ますにはおとなしくしているのが一番だと、自分なりの結論を出しただけだ」

我ながら、おかしな経験をしていると思わないでもないがな。

最後にそう付け加えられて、サトラまでもが思考を停止してトモを見つめた。

「まあ、信じられるような事じゃないから、信じてもいいと思うところだけ信じてくれればいい。私自身、自分がそんな目にあっていなかったら信じられるような現象じゃないからな」

そこまで言い切つてから、ふと気付いたようにナギを見た。

「ナギ、まだ余力はあるか？」

「まだまだ大丈夫ですが？」

言ってみただけなのだが、真顔で返されてトモは一瞬言葉に詰まる。

「ごどもつぱいのか生真面目なのかわからない性格をしているな、と思う。」

「…言ってみただけだ。ついでを頼むようで悪いが、結界を張ってくれるか」

『結界、ですか？構いませんが、どのようにしましょう』

「この集落を包む程度でいいから、人間が近寄れないように」

その言葉に、三人の意識が覚醒する。

「ちよ…それ、本気？」

信じられない、とばかりに詰め寄るテリーに、やはりトモは平然と答える。

「冗談を言つてどうなる？」

心底不思議そうに返されて、テリーはそれ以上の問いかけは無駄だと感じた。知らず、がくりと肩を落とす。

「あと」

ぴ、と人差し指を一本立てて。

「スイコを含めて、この集落の誰にも気付かれないように、な」

言われた内容にきよとんとした表情を見せたナギだったが、すぐに微笑んで頷いた。

『お安い御用です』

言葉と同時に、彼女の周りからボールのようなものが現れて外へと流れていく。

『完了です。他に御用は？』

「今はこれで充分だ。欲を言えば、寝る時に冷えないように暖かい空気を出してくれると有難いんだが」

贅沢かな、と苦笑したトモの言葉を否定して、ナギはすぐさまそ

れを用意する。

『これで宜しいですか？熱かったり冷たかったりしませんか？』

「いや、ちょうどいい。ありがとう。もういいから、ナギも休んでくれ」

『…わかりました。それでは、どうぞごゆっくりお休みくださいませよ』

「ああ、お休み」

その会話を最後に、彼女は姿を消した。

呆然と、三人はそのやり取りを一言も口を挟む事が出来ずに見守っていた。

あまりにも、現実味がなさすぎるやり取りだったからだ。

「?どうした?」

おまけのように出してくれた温かい水の枕に頭をのせて、トモは三人に声をかけた。瞬間、少し青褪めた顔のルマが飛び上がる。

「なっ……なんなの!?!」

「?…何が?」

さっぱりわからない、というように見つめてくるトモに、もう慣れたのかサトラは驚愕を通り越して呆れている。

「至れり尽くせりだな」

少し嫌味をこめて言ったのだけれど。

「ああ、優しいだろう?自慢の家族なんだ」

嬉しそうに返されてはそれも無意味だ。

「…それ、どんな仕組み?」

恐る恐る指をさすテリーの視線の先にあるのは、水の枕。

「ああ、水を温めて薄い膜で包んで濡れないようにしたものだそうだ。前にも同じ物を出してもらった事があるから確かだ」

わりと触り心地はいいぞ。触ってみるか?と聞かれても、テリーは首を横に振って拒否した。

なんだか怖くて触れない。

その後少しだけ会話を交わして、げっそりとした顔でルマとテリ

「は洞穴から出て行った。」

「お前達には珍しい事だったのか？」

言いながら水の枕を突く姿に、サトラは言いたい言葉を飲み込んだ。言つても無駄な気がするからだ。

「かなりな。…ところで」

少し低い声で話題の転換をはかると、トモはあっさりとそれについてきた。

「ああ、さっきの事だろう。…お前、自分の力は制御できてるんだな」

そうでなければ、この集落全体が大騒ぎになっているか、今頃サトラはここにいない。

「それをどうしてわかったのか、俺は知りたい」

真剣な瞳を向けられて、トモは寛いでいた体勢から正座にかえる。そしてしっかりとサトラを見据えて、口を開いた。

「周りに同じような状況で、運悪くお前のようにには制御できずに追いつてられた連中がいるからだ。うまく制御していた奴も実力を知られて追い立てられた。人に限らず、自分達と少しでも違う者は異分子扱いするんだな」

困ったもんだ、と疲れたようにため息をつく姿に虚をつかれる。

目を瞬かせるサトラに気付いて、トモは覇気なく笑った。

「そういう連中の慟哭は聞くに堪えない。離れたくもないのに離れた奴や、近づくと事を拒絶された奴もかなり痛々しいが…。全てを理解しているふりをして、自分から見限ったかのように振舞って離れた奴が、私には一番厄介でしかたがない。最後まで抗って諦めた連中とは、少し違うから」

未練が一番残りやすい。

「それに…自分は大切なものを持つてはいけないんだと、諦めている奴も、いるな」

いろんな奴がいる。それぞれがそれぞれに抱えきれないものを抱えている。

そう呟いて、トモはサトラに苦笑いを向けた。

「何故だかそういう奴らと出くわす事が多くてな。人に限らない。

…そう、お前は気付いたな。どんな種族の気配を感じ取った？」

凜とした空気を纏って、トモはそこに座していた。意識をすっぱりと切り替えて、サトラの言葉を聞き取るうとしている。

「…聖獣」

ああやはり、とトモは思った。

彼も、希有な能力を生まれ持ってしまったのだと。

「ご明察。それでお前は、私を聖獣だと思ったか？それとも人間だと思った？」

静かに答えて更に問いを重ねる姿を、やはりサトラも静かに見つめている。

「人間、だ。確かに聖獣らしき気配は感じ取れるが、お前のものではない」

「その通り。私は人間だ。私は今日、市に行くまでに聖獣と一緒に遊んでいたからな。彼女の気配が移ったんだろう」

「一つじゃない」

びた、と、飲み物に手を伸ばしかけていたトモの動きが止まる。

「一つじゃない？」

手を戻して、静かに問い返す。トモの瞳に映っているのは、無表情なサトラの顔。

「魔族の気配もした」

そこまでわかるほどの力を持っているのなら、この中に埋没するように振舞うのは辛かったろうに。

言われた言葉にすぐさま浮かんだのはそんな事だった。気配だけで相手が何者かを悟るだけで尋常じゃないと言われるほどののに、残り香のように残っている気配を正確に読み取るほどの力は、異端だと言われている者達にとっても脅威だろうに。

予想していたよりもサトラが置かれている状況は悪いものだった。

「……そうか。魔族、とは市でたまたますれ違っただけなんだがな。

まあ、あいつは気配を隠しもしないから、まだいいとして」

そうして一息置いてから、トモは一番知りたい事を尋ねた。

「聖獣の気配が一つと、魔族の気配が一つ、なんだな？」

「……………」

こくりと、無言で頷く。その答えに安堵した。

「……………良かった」

「良かった…？」

「いや…その」

気が緩んだはずみに零れてしまった本音を聞きとがめられて、さすがにまずつたと焦ったけれど。

「大丈夫だ」

「…何が」

怪訝そうに見られても、トモは構わなかった。

大丈夫。独りじゃない。

「サトラ。お前が持っている力は確かにとつもないだろう。お前のように、残り香のような気配を読み取るだけの力の持ち主なんて、滅多にいない。だけど、お前は独りじゃないよ」

柔らかい笑顔で言われて、サトラは咄嗟に言葉が出なかった。

「お前にだけ言う。他には誰にも言うな」

優しい笑顔から豹変するように厳しい顔つきになったトモに、再び言葉を奪われる。サトラは言いたい事が確かにあるのに、どうしても音に出来ない。音にする前に、奪われてしまう。

「私は今日、人と、気配を隠した聖獣と一緒に市を回っていたんだ」  
「なっ……………」

サトラに言葉を挟まれる前に、トモは急ぐように言葉を続ける。

「聖獣はあまり人前に現れないんだろ？それは友人から聞いた事があるから知ってる。けど、その聖獣は私にとって家族で、弟やこどものようなものだから、傍にるのが当たり前なんだ。お前と同じように、気配で相手が何者か察するほどの力の持ち主だよ」

そこまで言い切ってから、トモは落ち着くために一度深呼吸をし

た。そうして、サトラが言葉を理解しているのを確認してから、もう一度口を開いた。

「ついでに言えば、そいつは気配を隠すだけじゃなくて、人間のように思わせるだけの器用さも持っている。他には、その隠した気配さえ読み取るような奴もいる。それぞれが、得意な事が違っているんだ。だから、気配を読み取る事に優れているからって、自分を異端だと思ふ必要はないし、悪い事じゃないのに苦しむ必要もない」  
まあ、いきなり意識を切り替えるのは難しいと思うけどな。

最後に呟くように言ってから、トモはルマにしたように、サトラの頭を撫でた。彼の身体が強張るのも気にせず、自分がしたいからという我侭を突き通して撫で続けた。

「これで信じられないなら、ナギが張った結界の気配を探ってみるといい。張られる瞬間は見ていただろう？」

言われて、魔力の気配を辿る。全力を注いで、辿ってみたけれど。

「……ない……」

呆然と、彼は呟いた。

「そう、ない。気付かれないようにしてくれと、私が頼んだからな」

「……でも……」

今まで、感じ取れなかったものなどなかったのに。

「サトラ。そういう事なんだ。確かにお前が凄い力を持っているのは事実だろう。だけどそれが全てじゃない。ここにいる限りお前はお前をこえる者が生まれるまでは一番大きな力を持った者かもしれない。私は力を感じ取る能力なんてないから、他の連中の力なんてわからないが。だけど、この外には、お前と同じような実力者は他にもごろごろいる」

「……ごろごろ？」

「……そんなに多いか……？」

さすがにそれはないだろうと思って眉根を寄せた顔で言えば、トモは不思議そうに首を傾げた。

「そうか？私の友人やその仲間や家族なんかは、わりと平気でそう

いう会話をして、力比べをしたりして遊んでいたが」

「たまに私の部屋を壊したりして、迷惑もかけられたっけ。」

「力…比べ……」

「遊んでた??」

「そう、力比べで遊んでいた。確かに最初は彼らも自分の力に悩んでいたらしいが、その中に二人ほど、それがどうしたと素で言い放つような強者がいたんで、悩むのが馬鹿らしくなったらしい。いい傾向だ」

「にっこりと満足そうに笑うから、サトラはつい、脱力して地面に手を突いてしまった。」

「あともう一つ言っておくと、私の周りに聖獣は何人…何匹? まあいい。わりと多くいるが、その全てが人型をとっているぞ。力が足りない者は人の魔法の補助を受けて、な」

「にやりと、どうだとばかりに驚愕の事実を突きつけてくるトモに、全面降伏とばかりにサトラは両手を挙げた。」

「……なかなか濃い環境にいたんだな……」

「ああ、魔法使いにそう言われた。しかし、そう言った魔法使いからして妻が聖獣だからな。人の事は言えないだろう」

「さらりと爆弾発言をして、トモは先程飲み損ねた果汁を口に含んだ。さっぱりした喉越しが好みだ。」

「……何からつつこめばいいのか、わからない……」

「なんだか頭痛がする。」

「額に手を当てて唸るサトラを、トモは面白そうに見ている。」

「私には私がおかれている環境の凄さだとか特異さはさっぱり理解できないが、とりあえず友人連中がそう言うから、そうだと思っただけだ。だいたい、気配が読めるとか読めないとか、言われなきやわからんし、私にとっては気配なんて読めても読めなくても大差ないからな。深刻に考えすぎると深みにはまるから、程ほどにしろとだけ言っておく」

「あっさりと自分が長い間悩んでいた事柄を一蹴されて、怒ればい

いのか嘆けばいいのかわからない。

「だから、面倒なら隠しとけ」

誰だって秘密の一つや二つはある。それを隠してはいけないというなら、皆何事も隠さずに生きなければならぬだろう。

「別に害はないんだろ？ だったらいいじゃないか」

実にあっさりと言い切ってくれた。

「……それは、お前が俺のような力を持っていないから……」

言われ、トモはぱちくりと目を瞬いた。そして、ああそうか、と思いついた。

「確かに私は力なんてない。だから、周り中何かしらの能力持ちだらけで、私はその中では異分子、にあたるが、誰もそんな事できつくあつたり、疎外したりしないぞ？」

状況が変われば立場も変わる。だからその中にもしお前がいれば、普通じゃなくなるのは私で、お前は大勢の中の一人だな。

「髪の色が茶色い連中の中に一人金髪がいればそれは一人だけ違う事になるし、男の中に女が一人いればそれも一人だけ違う。違うものを排除しようとするのは、本能なのかな」

面倒な性だ、とぼつりと呟いて、トモは再び果汁を飲み込んだ。

（我ながら、珍しく饒舌だな）

こんなところ、家族や友人に見られたらなんて言われるか。半分は驚いて半分はからかいに来るんだろうな。ああ、鬱陶しい。

そこで、そういえばとサトラの様子をしてみる。

「……何を固まってるんだ？」

「……少し、許容量をこえたんだ」

「ああ、それならゆっくり整理すればいい」

あっさりと言い捨てて、トモはもう一度喉を潤した。

「そういう力を持っていると、どうにも振り切るのに時間がかかるらしいな。私には無縁の事だから無責任な事しか言えないが、いつまでも拘っていたって楽しくないんじゃないか？」

「……お前は外見と中身の落差が激しすぎないか」

「は？」

脈絡のないことを言われた。

「達観した年寄りみたいだ」

疲れたように呟くサトラをじいっと見つめてから、トモはふむ、と何かを考えるように顎に手を当てた。

それを見て、本能的にサトラは良くない事だと察する。

「私はもともと物事にはあまり執着しない性質で、もう少し執着を持って友人に叱られた事もあるが…ま、種明かしは後の方が良さそうだな？」

にやりと、性質の良くない微笑を見せられて、無意識にサトラは頭を上下に振って答えていた。

「そうか。…ふうん？」

「……なんだ、そのふうんというのは」

聞いてはいけないような気がしたけれど、聞かなければもっと悪い事になりそうな気がした。

「いや、お前達に絡んでみるのも楽しそうだと思って」

にっこりと、邪気のない笑顔を見せられてしまって、サトラはさっそく後悔した。

自分達が見つけてしまったこの少女は、実はとんでもない生き物なのかもしれない。と今更悟った。

サトラがとんでもないと評した少女が、本当にとんでもない提案をするのは、翌日の早朝。もしそれを知っていたら、三人は逃げ出していたかもしれない。

## 第二話

サトラたち三兄弟と精霊スイコとトモが邂逅した翌日、カーテレ入国首都のある建物のある部屋で、一人の青年が唸っていた。

「……減らん……」

判を押してもサインしても部下に仕事を割り振っても、肝心の書類仕事が減らない。上司の代行を許されている範囲のものを仕上げても仕上げても、肝心の上司がいなければどうしようもないのだ。

「いつたいどこに雲隠れしやがった、あのうつけ者がっ……!!」

普段なら庭にも響き渡るほどの大声で怒鳴る青年が、低くうめいている。それだけで、どれほどの怒りが込められているのかを察するには充分なほど、同じ部屋で仕事をこなしている面々は付き合いが長かった。

特に一番付き合いが長い、もうお年寄りの域に片足を突っ込んでいる男性が、ぼんぼんと優しく肩を叩いた。

「仕方がない。あいつはいつもそうだから」

慰めているのではなく、諦めるしかないと諭している。諦めるのが精神衛生上一番いいのだとわかっていても、青年は諦めたら負けになる気がして、それができずにいる。

と、そこに、ノック音が響いた。さすがに気心が知れている面々以外の部下に苛々している姿を見せるわけにはいかなくて、青年は深呼吸をして気を落ち着けると、入室の許可を告げた。

「失礼します」

現れたのは、青年とさほど年の差がなさそうな、朗らかな雰囲気  
の少年が一人。

「お前か。珍しいな。直接報告書を持ってきたのか？」

「まあ。というより」

「？」

首を傾げる上司を見て、少年は心の中で苦笑した。

「一月ほど前に提出した書類が、何故か破棄処分の書類に紛れていたので、それを届けに来ただけだ」

「……何だと？」

途端に尖った雰囲気になった上司に怯むことなく、少年は事情説明に入る。

「確かに、上に目通しを頼んで欲しい、って言付けたんだけどさ。さつき手すきだったから何人かで作業したら、見覚えのある、でもあるはずの確認印が捺されていない書類が目についたから、確認しようと思って。でもあの入れ物にあったって事は、つまり、そういう事だよな？」

眉間に皺を寄せて、青年と男性は顔を見合わせた。そうして、青年が無言で少年を手招きする。それに素直に従って、少年はこちらも無言で書類を差し出した。

「……こんな重要な内容のものを、破棄処分にしただ……？」

あー、雷が落ちる寸前だな。と男性と少年は心の中で呟いた。他の仕事仲間は、顔を青褪めさせて自分の仕事机から遠く離れ、扉付近で震えている。

(……憐れな)

かわいそうに思うが、まあ、暫くは我慢してもらおう。

一番年下である少年はそう結論付けて、書類を睨みつけている上司に意識を戻した。

「で、どうしましょ？」

伺いを立てる少年に視線を向けることもなく、青年は確認印を捺して、懸案事項へと分類わけをする。

「この内容も腹立たしい事この上ないが、問題は、これを破棄処分扱いした奴だな」

「ま、そうだろうね。簡単に握りつぶせると思ったんじゃないの」

その言い方から、だいたいの見当がついているのだと知れる。そうでなければ、握りつぶせるなどという言い方はしないだろう。

「ああ、お前は普段は末端の仕事をしているからか」

男性の言葉に、少年は頷く。

「そう。直接こんな所に来れるとは思ってなかったんだろうな。ついでに言うと、破棄処分の書類を確認できるような立場とも思われていない、って事。狙ってそう振舞っているから、今回のこれは成果が出てる証拠で、ある意味嬉しいけどね」

「けど、隠滅できずに破棄処分扱いにするしかないほど、互いへの監視は厳しいって事だろう?」

青年の言葉に、これまた少年が頷く。

「どんな些細な内容だろうと、上に見せずに処分する事はできない。でも、一番上に見せるまでにくつもの役職に就いている人の目を通るから、途中で破棄されて内容がわからなくなる事も多いんだよ。今回は、たまたま俺が作った報告書だったから発覚しただけだしね」

こんな問題、面倒なだけだから嫌なんだけどねー。

興味なさ気に言い切った少年に、不機嫌な顔をしてみせても注意はしないのだから、青年も男性も概ね意見は同じなのだろう。

「普段、どんなにやる気がなさそうに見える振る舞いをしていても、こういう事には敏感だからな、あいつは」

「……本気で怒ったら、怖いだろう」

青年の呟きに、憂鬱そうに男性が言葉を返す。それを聞いていた少年は男性とは正反対に満面の笑みを浮かべた。

「そういう連中は、一度、痛い目を見ればいいのさ」

笑顔でさらりと毒を吐く少年を、青年と男性以外の人々が引き攣った顔で見ている。

ああ、そういうえばこいつらは本性を知らなかったんだっただか、と青年は気付いた。そして、今から慣れていたほうが後々のためだろうと思いい、少年の変わり振りを誤魔化そうと開きかけていた口を、閉じた。

曲者に慣れるには、経験をつむしかないだろう、というのが彼の持論。

青年の考えている事がなんとなく読めて、男性は深いため息をつ

いた。

「で、国王代理。俺、そこに行ってもいいかな？」

「こら、代理つて言うんじゃない。誰が聞いてるかもわからないのに」

焦つて窘める青年を気にもせず、少年は周囲を確認する。

「平気だろ。ここにいる人はみんな、事情を知ってるじゃないか。今さら今さら」

ひらひらと手を振つて歯牙にもかけない少年に、さすがの青年も疲れたようなため息をついた。

「なあ、俺は国王代理じゃなくて、本来は宰相なんだが」

男性の言葉をきちんと聞いていても、彼の意見が翻る事はなかった。

「でも、三十年以上国王の振りして国民の前に出てるんだろ？それこそ今更じゃないか」

何を言ってるんだ？というように返されてしまつて、男性もそれ以上の言葉を紡ぐのは断念した。

「で、その国王は？」

「お前、一緒だったんじゃないのか？」

「いや、何日か前から城下の宿屋に泊まつてたから」

今日は一緒に本を読む約束をしてるんだけど、と告げた少年に、男性と青年は気まずそうに顔を見合わせた。

「？どうかした？二人ともなんか変な顔してるけど」

変な顔、と言われても怒れないほどには、二人は困っている。

「……脱走した」

「……は？……つて、また？」

「そう、また。いつもの如く、脱走」

「今回は何日くらい？」

「今回は何日も経つてない」

「ふーん。……でも、俺との約束があるのに脱走つて、なあんか不自然」

「ああ、俺も思った。お前との約束があるとは知らなかったから、いつもの脱走だと思っていたんだが」

「が、残念な事に、約束があっても脱走したことが過去に何度かある」

遠慮なく、男性は事実を告げた。勿論、それは必要にかられてとった行動なのだと、約束していた者達はわかっているが。

「………そういえばそうだった」

うーん、と唸る三人に、周りにいる仕事仲間が声をかけられない。と、そこへ、新たに一人の少年が姿を現した。

「………いつまでも帰って来ないと思ったら、こんな所で油を売ったのか」

ジロリと睨まれて、少年は少しだけ困ったように笑った。誤魔化し笑いが通用しない相手だとわかっているにもかかわらず、そうするしかない。

「それであなただ方は、顔を突き合わせて何をなさっているんですか」  
咎めるような視線を向けられて、男性と青年はそれこそ苦笑いをした。目の前の陽気な少年以上に、扉の傍に佇んでいる生真面目な少年に弱い事は、二人とも自覚している。

陽気な少年もそれなりに生真面目な少年に弱い、それでも男性と青年よりは甘い顔をせずには済んでいる。

よって、事実を告げるのは、彼の役目だった。

「お前の父さん、脱走したってさ」

苦笑しながらもあっさりと言葉に、生真面目な少年は襲ってきた眩暈に耐え切れず、倒れた。

数秒の沈黙。

その後騒然となった執務室に火急の知らせが届くのは、もう暫く後の事。

「今、なんと言った？」

「だから、暫くここにいて、と言った」

にっこりと、それが決定事項だというようにきっぱりと告げるトモに、スイコは頭痛を覚えた。頭痛なんて、本来無縁である筈なのに、と嘆きたい気分だ。

「お前、私がどれだけ慎重にここから立ち去る許可をもぎとってきたと思ってる…？」

怒り半分、諦め半分。

そんな心情を理解しているのかどうかわからないが、トモはあっさりと、

「ああ、かなり苦労したんだろう」

と言つて、ルマが用意してくれた川魚の塩焼きを頬張った。暫く咀嚼して、一言。

「へえ、塩加減が私好みだ。おいしい。ありがとう、ルマ」  
にっこりと微笑みつきでお礼を言われて、ルマはかなり嬉しかったけれど、崇拜対象の精霊の手前、控えめに笑うだけにとどめる。

「で、お前は食事が必要ないといつても、少し陽光を浴びた方がいいんじゃないのか？」

自然に言われた言葉に暫く反応できなかったが、対象が自分だとわかるとスイコは驚いたようにトモを見た。

「…そんなに不思議そうに見るな。誰だつて空腹になるのは辛いと思っただけだ。平気ならそれでいい」

ぱくりともう一口頬張つて、ゆっくりと味わう姿に、そういえば自分はまだ食事をしていなかった、と気付いて、スイコは傍を離れる旨を告げて洞穴から出て行った。

「精霊は食事をしなくても多少力が衰える程度だと聞いた事があるが、不測の事態に備えるのは常識だろうに」

こくりと清流の冷たい水を含んで、ふう、と満足そうに息をついたトモを、三人はやはり不思議そうに見ている。

「私の顔に何かついてるか？」

「いや……。なんで、ここにしようと思ったんだろう、と」

テリーが躊躇いがちに答えると、トモは納得したように頷いた。

「理由は特にないんだが……勘？」

「勘、て……」

絶句してしまったサトラとルマを後目に、トモは再び魚に口をつけた。

「そういえば、ドラゴンは何でも生で食べるんだろう？火はどうしたんだ？」

咀嚼した魚肉を飲み込んで、トモはルマに尋ねた。彼女は一瞬びくつと肩を跳ね上げたが、すぐにぎこちないながらも笑顔を返す。

「魔法で、ちよちよいつと」

「……ちよちよい、で魔法が使えるのは凄いな……」

確かに魔法使いに比べれば、ドラゴンや精霊や聖獣はいとも簡単に魔法を使ってみせるだろう。魔法をまともに扱えないのは人間くらいだ。

「そういえば、私がここに来てからずっと人間の姿をしているが、疲れないのか？それとも人の姿をとる能力が、魔法とは別に備わっている種族なのか？」

「……ああ、それね。これは魔法による変化だから、使えない者と使える者にわかれるし、使えるとしても使わない、っていうのが大多数だけだ」

でも、最初に出会った時がこの格好だったから、とテリーは理由を述べる。サトラはこの洞穴の大きさがドラゴンの姿だと窮屈だからだ、と言ったけれど、トモへの気遣いによるものだというのは皆がわかっている。

「ふうん？……ここに来てから、人の姿をしているのはお前達くらいだから逆に違和感があるというか……ま、どちらの姿でもお前達だという事にかわりはないから、私は別にいいが、疲れないのか？」

「そりゃまあ、多少は疲れるけど」

「そうか。優しいんだな、ありがとう」

にこりと笑われて、三人は反応に困る。そんな風に無邪気に笑われても、守ってあげられるわけじゃないのに、と少し心苦しい。

「ところで」

「ん？」

トモが話の流れを変えようとしているのがわかって、テリーはちやんと聞いているという意思表示も兼ねて聞き返した。それを確認して、トモは焼き魚を葉の器に戻す。

「お前達は…テリーもルマもサトラも、ここにいるように言われているのか？」

「え？いや、別にそんな事はないけど。なんで？」

「昨日もだが、食事の時に傍にいてくれただろう？監視しろとも言われているのか、それともこの集団の中でそれぞれが役割を持っているのか、と、そういう事が気になっただけなんだが…」

私に構っていて大丈夫なのか、と最後に要点を告げて、トモは三人の出かたを待った。

一様に、きよとんとした顔を晒している。兄弟だと反応まで似るんだらうか？とあまり重要性のない事をぼんやりと考えながら、トモは口を噤んで待っている。

「…えーと……言葉はよくないんだけど、私達はトモの監視を命じられてるの」

本当は言っではいけない内容だけれど、昨日からずっと傍にいても悪意を感じ取れないトモになら、教えても大丈夫な気がした。

「そうか。…なあ、一つ提案があるんだが」

にや、と、悪戯っぽい笑顔で切り出したトモを、三人は一斉に一歩後ずさって見た。その反応に一瞬不快そうな表情を見せたが、すぐににこりと微笑んでみせる。

それがまた、三人を蒼白にさせる態度だったのだけれど、本人は気付いていない。

「山を一緒に下りてみないか？」

言われた事がわからなくて。

三人そろって、目を見開いたまま硬直してしまった。

「おい？聞こえてるか？」

ひらひら、と三人の目の前で順に手を振ると、どうにかこうにか我に返ったのはルマのみ。

「えっと…それはどういう？」

「ん？いや、一月前に人間の集団がやってきたんだらう？ずっとここにいて護りに徹するのもいいが、まずは実情を知りたいと思わないか？」

仮に人が押し寄せてくるにしても、後手に回るのは嫌だらう？

ぴ、と人差し指を突きつけられて詰め寄られて、ルマは返答に窮する。

…本音を言つて、大丈夫かしら。

「…そりゃあ、気になるけど…頭領や長老はともかく、長が黙つて行かせてくれるとは思えないし…」

人間相手となれば、集落を守る事に必死な頭領は特に異見は唱えないだらうし、長老とてそうだらう。

けれど。

「長？頭領と長老と長は、すべて違う者なのか？」

「あら？言つてなかった…？」

「言わないよ。トモには関係ないことだし」

やっと復活したのか、テリーが口を挟んできた。それに少しむっとなしながらも、ルマは努めて静かに反論する。

「それはそうだけど。でも別にこれくらいの説明はしてもいいですよ？」

不機嫌だと察したテリーは、ちらりとサトラに視線を投げた。それに応じてサトラは口を開く。

「人里に下りたとしても、情報を集める方法が俺達にはない」

「それは私が代わりにできる。それに、人間全てがお前達に害を加えるわけではないと、きちんと知ってもらいたいからな」

どうだろう？と尋ねられて、三人は互いの顔を見交わす。

仮に人間達の住処に奇襲をかける事になったとして、一番に借り出されるのは自分達のような若い者から、父や母のような、動きやすく体力もある者だろう。

正直なところ、そんな事で万が一命を落とすような事になってはたまらない。

さて、どうしよう、とぼそぼそと相談を始めた三人のすぐ傍で、トモは静かに流れる小川を見つめている。

トモが考えているのは目の前の三人の事ではなく、もっと別の事。

(それに……人間が残した汚点は人間が雪ぐしかないだろう)

本音はそれだけれど、それは言えない事だから。

(ややこしくなる前に、なんとかしないと)

人間とドラゴンで戦争勃発なんて事になったら、今ここにいる自分が不甲斐無さ過ぎて悔やんでも悔やみきれない。

だったら、そうなる前になんとかしなければならぬ。火種はすぐ傍にある。この者達は不穏さを隠しもしていないのだから尚更だ。

(……？そういえば……)

「そういえば、私はお前達以外のドラゴンとろくに顔も合わせていないんだが、やはり警戒されっぱなしなのか？」

「え？ああ……まあね」

言い繕っても詮無い事なので、テリーはありのままを語る。

「精霊殿の事は歓迎しているようだけど、トモの事は、人間だからって事でやっぱり警戒してるよ」

「まあ、そうだろうな」

はあ、とため息をついたトモだけれど、実はそれほど気落ちしているわけではない。それは傍で見ている三人にも感じ取れた。

かりかりと頭を搔く、人間らしい仕草をしながら、テリーが再び口を開いた。

「でも、好意的なのも実はいるんだよね……」

きよとん、と見つめられて、テリーは視線を逸らした。

「さつき言った、長よ。長は、昔に人の許にいた事があるんですけど。とても親切にしてもらったから、人間に無差別に害を加えることに一番反対されているの」

「で、実はその長ってというのが、長老の孫にあたる位置にいて、実は僕らの叔父さんなんだよねえ……」

「……なかなか複雑そうだな……」

「そう。それも母様のお兄様じゃなくて、父様のお兄様だから、余計にね」

なるほど、とトモは頷く。

「という事は、お前達は長老のひ孫か？」

「一応はね。でも、年に一回会うか会わないか程度だし。もともと血縁者だからこそ厳しい方だから、あまり好きになれなくてね」

ぱくりと、食後に運ばれていた果物を口にするテリーの表情は少し暗い。

「複雑そうだからつつこまないでおくが。長老と長とやらはわかったが、頭領とは役割の違いはなんなんだ？」

「ああ……最高権力者っていうの？それが長老。現役引退とでも言えればいいのかしら。現役が長ね。頭領は、あれこれ指示をしたり皆をまとめたりする実質的な指導者。でもその判断に長や長老が反対すれば、それに従わざるをえない。逆に言えば、それ以外は頭領には逆らえない。そして、長老は自分の意見を押し付ける事はできないのよ。一番動きにくいけれど、動きやすくもあるのは長ね」

「血縁者同士で牽制しあってる、って事が」「恥ずかしながら」

そういう事は自分には無縁で良かったな、とトモは不謹慎ながらも思った。自分がこの場所に続けることで多方面に迷惑をかけているのは自覚しているが、それでもここを去るにはあまりにも状況がおかしかった。

「……で、お前達は？」

「え？」

首を傾げるルマに、サトラはため息をついた。彼とテリーは、トモが言いたい事が何かわかったのだろう。

「お前達は、意見は長老よりか？それとも長よりか？」

別に非難するような言い方ではなかったけれど、人間であるトモを前にして事実を言うのはさすがに躊躇われる。

けれどその沈黙こそが、答えだった。

「そうか。しかしそれは仕方がないな。一部とはいえ、人がお前達に害を与えたのは事実だから……だが」

ぴり、と空気が張り詰めたのを感じた。空気が一段冷えた気さえする。

「やはり私は人間だから、長のような考えを持つ者がいるとわかって嬉しいよ。で、山を下りる許可は、その長に頼めば出してくれそうかな？」

人間である、私が頼めば。

どうだろう、とお伺いを立てることももの様に期待と不安が僅かに見え隠れする瞳を向けられてしまって、三人は無言で降伏した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6580f/>

---

緑の隠れ里

2010年10月11日20時22分発行